

流山新市街地区 埋蔵文化財調査報告書9

一 流山市十太夫野馬上手、流山市・柏市市野谷駒木野馬上手、
流山市駒木野馬上手 一

平成29年3月

独立行政法人 都市再生機構

公益財団法人 千葉県教育振興財団

流山新市街地区 埋蔵文化財調査報告書9

ながれやましじゅうだゆうのまどて、ながれやまし かしわしいらのやこまきのまどて、
— 流山市十太夫野馬土手、流山市・柏市市野谷駒木野馬土手、
ながれやましこまきのまどて
流山市駒木野馬土手 —



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを目的とし昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第767集として、独立行政法人都市再生機構の流山新市街地地区土地区画整理事業に伴って実施した流山市十太夫野馬土手、流山市・柏市市野谷駒木野馬土手および流山市駒木野馬土手の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、近世の小金五牧の中のひとつである上野牧および高田台牧に関連する野馬土手などの遺構が検出されており、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成29年3月

公益財団法人 千葉県教育振興財団
理 事 長 平 林 秀 介

凡 例

- 1 本書は、独立行政法人都市再生機構による流山新市街地地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県流山市初石5丁目4番地ほかに所在する十太夫野馬土手（遺跡コード 220-048）、駒木野馬土手（遺跡コード 220-060）、市野谷駒木野馬土手（遺跡コード 220-056・217-035）である。
各野馬土手は多年次にわたって調査が実施され、調査回数では調査区相互の関係が不明となるため、1から番号を付け直した。1-(30) → 2-(25)。(00)内の数字は調査年次の番号となる。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者及び実施期間は第1章第1節に記載した。
- 5 本書の執筆・編集は、上席文化財主事 池田大助が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、流山市教育委員会、柏市教育委員会、独立行政法人都市再生機構の御指導・御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
第1図 国土地理院発行 1:25,000 地形図「流山」(NI-54-25-1-2)平成17年8月発行。
- 8 本書で使用した航空写真は、京葉測量株式会社による昭和44年3月撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位はすべて座標北であり、日本測地系（国家標準座標第Ⅸ系）に基づいている。なお、抄録に記された座標値は、国土地理院が提供する世界測地系変換（TKY2JGD Ver1.3.80）により変換したものである。

本文目次

序 文

凡 例

目 次

| | | |
|-----|------------|----|
| 第1章 | はじめに | 1 |
| 第1節 | 調査の概要 | 1 |
| 1 | 調査の経緯と経過 | 1 |
| 2 | 調査の方法 | 1 |
| 第2節 | 遺跡の位置と環境 | 3 |
| 1 | 遺跡の位置と周辺地形 | 3 |
| 2 | 遺跡の歴史的環境 | 3 |
| 第2章 | 検出された遺構と遺物 | 8 |
| 第1節 | 野馬土手の調査 | 8 |
| 1 | 十太夫野馬土手 | 8 |
| 2 | 市野谷駒木野馬土手 | 41 |
| 3 | 駒木野馬土手 | 41 |
| 第2節 | 出土遺物 | 41 |
| 第3章 | まとめ | 48 |
| | 報告書抄録 | 巻末 |

挿図目次

| | | | | | |
|-----|-------------------------------|----|------|----------------|----|
| 第1図 | グリッド設定法 | 1 | 第8図 | 十太夫野馬土手3-(24) | 14 |
| 第2図 | 遺跡の位置及び周辺の地形、 周辺遺跡分布図(旧況図) | 5 | 第9図 | 十太夫野馬土手4-(14) | 15 |
| 第3図 | 流山新市街地地区内遺跡位置図(現況図) | 6 | 第10図 | 十太夫野馬土手5-(20) | 16 |
| 第4図 | 上野牧及び高田台牧範囲概要図 (1/25,000) | 11 | 第11図 | 十太夫野馬土手6-(7) | 17 |
| 第5図 | 野馬土手調査区・野馬土手概要図 (1/5,000) | 付図 | 第12図 | 十太夫野馬土手7-(6) | 18 |
| 第6図 | 十太夫野馬土手1-(30)A区・B区 | 12 | 第13図 | 十太夫野馬土手8-(22) | 19 |
| 第7図 | 十太夫野馬土手2-(25)A区・B区 | 13 | 第14図 | 十太夫野馬土手9-(16) | 20 |
| | | | 第15図 | 十太夫野馬土手10-(8) | 21 |
| | | | 第16図 | 十太夫野馬土手11-(11) | 22 |
| | | | 第17図 | 十太夫野馬土手12-(4) | 23 |
| | | | 第18図 | 十太夫野馬土手13-(21) | 24 |

| | | | | | |
|------|------------------------|----|------|-------------------------|----|
| 第19図 | 十太夫野馬土手14-(18) …… | 25 | 第31図 | 十太夫野馬土手26-(26) …… | 37 |
| 第20図 | 十太夫野馬土手15-(1) …… | 26 | 第32図 | 十太夫野馬土手27-(9) …… | 38 |
| 第21図 | 十太夫野馬土手16-(2) A区・B区 …… | 27 | 第33図 | 十太夫野馬土手28-(15) …… | 38 |
| 第22図 | 十太夫野馬土手17-(10) …… | 28 | 第34図 | 十太夫野馬土手29-(19) …… | 39 |
| 第23図 | 十太夫野馬土手18-(17) …… | 29 | 第35図 | 十太夫野馬土手30-(29) …… | 40 |
| 第24図 | 十太夫野馬土手19-(23) …… | 30 | 第36図 | 市野谷駒木野馬土手1-(1) …… | 42 |
| 第25図 | 十太夫野馬土手20-(27) …… | 31 | 第37図 | 市野谷駒木野馬土手2-(2) A区・B区 …… | 43 |
| 第26図 | 十太夫野馬土手21-(12) …… | 32 | 第38図 | 駒木野馬土手1-(1) …… | 44 |
| 第27図 | 十太夫野馬土手22-(3) …… | 33 | 第39図 | 駒木野馬土手2-(2) …… | 45 |
| 第28図 | 十太夫野馬土手23-(5) …… | 34 | 第40図 | 駒木野馬土手3-(3) …… | 46 |
| 第29図 | 十太夫野馬土手24-(28) …… | 35 | 第41図 | 調査区内出土遺物 …… | 47 |
| 第30図 | 十太夫野馬土手25-(13) …… | 36 | | | |

表目次

| | | | | | |
|-----|------------------|---|-----|--------------------|----|
| 第1表 | 各野馬土手調査経歴一覧 …… | 2 | 第4表 | 市野谷駒木野馬土手調査概要一覧 …… | 43 |
| 第2表 | 新市街地区周辺遺跡一覧表 …… | 7 | 第5表 | 駒木野馬土手調査概要一覧 …… | 44 |
| 第3表 | 十太夫野馬土手調査概要一覧 …… | 9 | | | |

図版目次

| | | | | | |
|-----|----------------------|--|-----|-------------------|--|
| 図版1 | 遺跡周辺遺跡航空写真 | | | 1トレンチセクション(東から) | |
| 図版2 | 十太夫1-(30) | | | 十太夫5-(20) | |
| | 調査前全景(北から) | | | 2トレンチ完掘(東から) | |
| | 1トレンチセクション | | | 2トレンチ完掘(西から) | |
| | 十太夫2-(25) | | | 十太夫6-(7) | |
| | 北側土手全景(南南西から) | | | 調査前風景(北から) | |
| | 5トレンチ(B区)完掘(北北東から) | | | 調査前風景(南から) | |
| | 十太夫3-(24) | | | 十太夫7-(6) | |
| | 調査前風景(南東から) | | | 調査前風景(北から) | |
| | Aトレンチ(北端)完掘(南から) | | | 2トレンチセクション(南西から) | |
| | Cトレンチ完掘(東から) | | 図版3 | 十太夫8-(22) | |
| | S K-001(Cトレンチ内)(東から) | | | 4トレンチ西側部分(南東から) | |
| | 十太夫4-(14) | | | 10トレンチセクション(北西から) | |
| | 調査前風景(北から) | | | 十太夫9-(16) | |

調査前状況
調査前状況 (北から)
調査前風景 (南から)
3トレンチ南壁セクション (北西から)

十太夫10-(8)
調査前風景 (北から)
土手掘削状況 (南から)
2トレンチ調査状況 (北から)
1トレンチ北面セクション (南から)

十太夫11-(11)
1トレンチセクション (東から)
2トレンチセクション (南西から)

十太夫 12-(4)
調査前風景 (北から)
全景中央部 (南から)
全景南側 (西から)
全景北側 (南東から)

図版4 十太夫 12-(4)
5トレンチ中央 (南東から)
4トレンチ溝セクション (南から)

十太夫 13-(21)
西部 (南から)
1トレンチ

十太夫 14-(18)
調査前風景 (南東から)
調査前風景 (南から)
調査前風景
1トレンチ

十太夫 15-(1)
調査前風景
1トレンチセクション (北西から)

十太夫 16-(2)
調査前風景

十太夫 16-(2) B
B区セクション

十太夫 17-(10)
調査前風景 (南東から)

3トレンチ土手セクション (西壁)
(東から)
2トレンチ完掘 (馬堀) (北から)
1トレンチ溝セクション (西壁)
(南から)

図版5 十太夫 18-(17)
調査前風景 (西から)
調査前風景 (西から)
3トレンチ完掘セクション (東から)
全景 (西から)

十太夫 20-(27)
調査前風景 (南から)
3トレンチ完掘セクション (南から)

十太夫 21-(12)
調査前風景 (南東から)
3トレンチ完掘

十太夫 22-(3)
調査前風景
セクション

十太夫 23-(5)
調査前風景 (南から)
調査前風景 (北から)
1トレンチ土手完掘
2トレンチ土手セクション

十太夫 24-(28)
調査前風景 (南から)
1トレンチ土手セクション (東から)

図版6 十太夫 24-(28)
1トレンチ堀セクション (東から)
3トレンチ確認状況 (南西から)

十太夫 25-(13)
調査前風景 (南から)
1トレンチ土手セクション

十太夫 26-(26)
全景 (北西から)
2トレンチ完掘 (北東から)

十太夫 27-(9)

調査前近景（南から）
1 トレンチ完掘
十太夫 28- (15)
調査前風景（北西から）
1 トレンチ西側（北から）
十太夫 30- (29)
調査前風景（東から）
1 トレンチ完掘土手セクション
市野谷駒木 1- (1)
調査前風景（北東から）
調査前風景（西から）
11 トレンチセクション（北東から）
2 トレンチセクション

図版7 市野谷駒木 2- (2)
西区調査前風景（南西から）
東区調査前風景（東から）
2 トレンチ確認状況（北西から）
4 トレンチ確認状況セクション
（南から）
駒木 1- (1)
調査前状況（北東から）
1 トレンチセクション（西から）
駒木 3- (3)
調査前全景（南から）
調査区全景（南から）
十太夫調査風景
十太夫調査風景
市野谷駒木調査風景
駒木調査風景
調査区内出土遺物（1）十太夫野馬土手
調査区内出土遺物（2）市野谷駒木野馬
土手

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

茨城県つくば市と都心を結ぶつくばエクスプレス（常磐新線）の沿線開発構想の一環として流山市新拠点構想が、独立行政法人都市再生機構により計画された。

この構想にあたり、流山市内に新設される流山おおたかの森駅を中心とした約40haという広大な開発計画が構想された。この事業に当たり、独立行政法人都市再生機構より千葉県教育委員会宛に計画地内に所在する「埋蔵文化財の所在の有無とその取り扱いについて」の照会文書が提出された。その結果、開発計画の周辺地域には多数の遺跡が存在しており（第2・3図、第2表）、また開発区域内には包蔵地14か所、野馬土手3条が所在しており、その取り扱いについて千葉県教育委員会との協議が行われ、住宅地、緑地など、現状保存の策定が行われ、現状保存が困難な区域については、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、公益財団法人千葉県教育振興財団が発掘調査を実施することとなった。

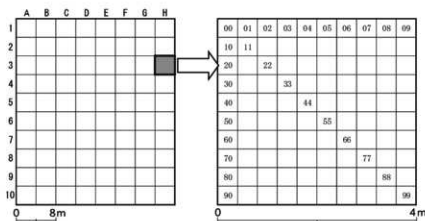
2 調査の方法

流山新市街地地区では、事業範囲全域を公共座標に基づく方眼網（日本測地系・国家標準直角座標第Ⅸ系）で覆い、全遺跡の遺構・遺物についてその位置を明確にしている（第3図）。

方眼は40m×40mを大グリッドとし、その中を4m×4mで100分割し、遺構・遺物に関する記録はすべてこの方眼網によって記録されている（第1図）。また記録類に表示した標高は東京湾平均海面（TP）による海拔である。

野馬土手の発掘調査に先行し、対象区域の地形測量を1/200で実施し、その現状を図化し、引き続き土手の断面及び盛り土の形状および土手内外の溝の状況を観察、記録した。

なお、野馬土手の調査は、平成12年度より平成26年度の長期にわたり、枝番号を調査順に付して実施したため、隣接する調査区において連続するものとはなっていない。



第1図 グリッド設定法

第1表 各野馬士手調査経歴一覧

十大大野馬士手 調査経歴一覧

| 年 度 | 調査次 | 対象面積 (㎡) | 確認調査 (㎡) | | 本調査 (㎡) | 調 査 期 間 | 担 当 者 | 調査事務所長 (調査課長) | 調査研究部長 (センター長) |
|------|------|-------------|----------|----|------------|-------------------------|----------------------------|------------------|-------------------|
| | | | 上期 | 下期 | | | | | |
| 平成12 | 1 | 72 | 12 | - | - | 平成13年2月1日～平成13年2月13日 | 主 席 研 究 員 南宮龍太郎 | 及川 淳一 | 佐久間 豊 |
| 平成13 | 3(2) | 45 | 12 | - | - | 平成13年9月3日～平成13年9月17日 | 上 席 研 究 員 久高 啓勝 | 田坂 浩 | 佐久間 豊 |
| | 3(3) | 33 | 12 | - | - | 平成13年9月17日～平成13年9月28日 | 副 所 長 岡田 誠造 | 田坂 浩 | 佐久間 豊 |
| 平成14 | 4 | 1,392 | 96 | - | - | 平成14年2月1日～平成14年2月28日 | 上 席 研 究 員 立石 圭一 | 田坂 浩 | 佐久間 豊 |
| | 5 | 512 | 48 | - | - | 平成14年7月16日～平成14年7月22日 | 副 所 長 岡田 誠造 | 田坂 浩 | 森本 勝 |
| | 6 | 48 | 6 | - | - | 平成14年11月1日～平成14年11月13日 | 上 席 研 究 員 竹内久美子 | 田坂 浩 | 森本 勝 |
| 平成16 | 7 | 289 | 24 | - | - | 平成15年1月7日～平成15年1月10日 | 副 所 長 岡田 誠造 | 田坂 浩 | 森本 勝 |
| | 8 | 400 | 40 | - | - | 平成16年10月18日～平成16年11月5日 | 副 所 長 高橋 博文 | 田坂 浩 | 矢戸 三男 |
| | 9 | 250 | 250 | - | - | 平成16年12月1日～平成16年12月6日 | 副 所 長 高橋 博文 | 田坂 浩 | 矢戸 三男 |
| 平成17 | 10 | 670 | 670 | - | - | 平成17年2月1日～平成17年2月14日 | 副 所 長 高橋 博文 | 田坂 浩 | 矢戸 三男 |
| | 11 | 340 | 40 | - | - | 平成17年11月30日～平成17年12月2日 | 上 席 研 究 員 郷原 英司 | 田坂 浩 | 矢戸 三男 |
| 平成18 | 12 | 1,150 | 150 | - | - | 平成18年2月13日～平成18年2月28日 | 上 席 研 究 員 郷原 英司 | 田坂 浩 | 矢戸 三男 |
| | 13 | 260 | 20 | - | - | 平成18年6月19日～平成18年6月22日 | 主 席 研 究 員 南宮龍太郎 | 田坂 浩 | 矢戸 三男 |
| | 14 | 650 | 58 | - | - | 平成18年7月10日～平成18年7月14日 | 主 席 研 究 員 南宮龍太郎 | 田坂 浩 | 矢戸 三男 |
| | 15 | 580 | 68 | - | - | 平成18年10月23日～平成18年10月26日 | 上 席 研 究 員 渡邊 高弘 | 田坂 浩 | 矢戸 三男 |
| 平成20 | 16 | 630 | 46 | - | - | 平成18年12月18日～平成18年12月28日 | 副 所 長 高橋 博文 | 田坂 浩 | 矢戸 三男 |
| | 17 | 1,050 | 84 | - | - | 平成20年5月1日～平成20年5月9日 | 上 席 研 究 員 田井 知二 | 及川 淳一 | 大塚 正義 |
| | 18 | 1,980 | 90 | - | - | 平成20年6月10日～平成20年6月13日 | 上 席 研 究 員 柴田 龍司 | 及川 淳一 | 大塚 正義 |
| | 19 | 1,250 | 44 | - | - | 平成20年8月12日～平成20年8月13日 | 上 席 研 究 員 柴田 龍司 | 及川 淳一 | 大塚 正義 |
| 平成21 | 20 | 940 | 52 | - | - | 平成20年9月1日～平成20年9月5日 | 上 席 研 究 員 田井 知二 | 及川 淳一 | 大塚 正義 |
| | 21 | 800 | 36 | - | - | 平成21年4月20日～平成21年4月28日 | 主 席 研 究 員 南宮龍太郎 | 橋本 勝雄 | 及川 淳一 |
| | 22 | 2,028 | 102 | - | - | 平成21年6月1日～平成21年6月17日 | 上 席 研 究 員 柴田 龍司 | 橋本 勝雄 | 及川 淳一 |
| | 23 | 580 | 53 | - | - | 平成22年2月23日～平成22年2月26日 | 上 席 研 究 員 田井 知二 | 橋本 勝雄 | 及川 淳一 |
| 平成22 | 24 | 393 | 45 | - | - | 平成22年7月1日～平成22年7月8日 | 上 席 研 究 員 矢本 節朗 | 橋本 勝雄 | 及川 淳一 |
| | 25 | 987 | 96 | - | - | 平成22年11月15日～平成22年12月8日 | 上 席 研 究 員 矢本 節朗 | 橋本 勝雄 | 及川 淳一 |
| | 26 | 1,066 | 74 | - | - | 平成23年2月1日～平成23年2月16日 | 上 席 研 究 員 矢本 節朗 | 橋本 勝雄 | 及川 淳一 |
| 平成23 | 27 | 665 | 54 | - | - | 平成23年2月17日～平成23年2月24日 | 上 席 研 究 員 矢本 節朗 | 橋本 勝雄 | 及川 淳一 |
| | 28 | 1,488 | 62 | - | - | 平成23年11月1日～平成23年11月15日 | 主 席 研 究 員 高橋 博文 | 橋本 勝雄 | 及川 淳一 |
| 平成27 | 29 | 633 | 14 | - | - | 平成27年6月10日～平成27年6月11日 | 上 席 文 化 財 主 事 岡田 誠造 (今泉 謙) | (小久貴隆史) | |
| | 30 | 763 | 77 | - | - | 平成28年2月17日～平成28年2月23日 | 上 席 文 化 財 主 事 岡田 誠造 (今泉 謙) | (小久貴隆史) | |
| 総 計 | | 21,944 | 2,415 | - | - | | | | |

駒木野馬士手 調査経歴一覧

| 年 度 | 調査次 | 対象面積 (㎡) | 確認調査 (㎡) | | 本調査 (㎡) | 調 査 期 間 | 担 当 者 | 調査事務所長 (調査課長) | 調査研究部長 (センター長) |
|------|-----|-------------|----------|----|------------|-----------------------|------------------------|------------------|-------------------|
| | | | 上期 | 下期 | | | | | |
| 平成16 | 1 | 600 | 600 | - | - | 平成16年11月1日～平成16年11月5日 | 上 席 研 究 員 郷原 英司 | 田坂 浩 | 矢戸 三男 |
| 平成22 | 2 | 490 | 43 | - | - | 平成22年1月4日～平成22年1月8日 | 上 席 研 究 員 田井 知二 | 橋本 勝雄 | 及川 淳一 |
| 平成25 | 3 | 693 | 97 | - | - | 平成26年2月17日～平成26年2月28日 | 上 席 研 究 員 宮 兼行 (白井久美子) | 伊藤 智樹 | |
| 総 計 | | 1,783 | 740 | - | - | | | | |

市野谷駒木野馬士手 調査経歴一覧

| 年 度 | 調査次 | 対象面積 (㎡) | 確認調査 (㎡) | | 本調査 (㎡) | 調 査 期 間 | 担 当 者 | 調査事務所長 (調査課長) | 調査研究部長 (センター長) |
|-----|-----|-------------|----------|----|------------|-------------------------|-----------------|------------------|-------------------|
| | | | 上期 | 下期 | | | | | |
| 平成1 | 1 | 2,884 | 160 | - | - | 平成15年1月14日～平成15年1月27日 | 上 席 研 究 員 立石 圭一 | 田坂 浩 | 森本 勝 |
| 平成2 | 2 | 99 | 10 | - | - | 平成23年11月16日～平成23年11月25日 | 副 所 長 高橋 博文 | 橋本 勝雄 | 及川 淳一 |
| 総 計 | | 2,983 | 170 | - | - | | | | |

第1表に十太夫野馬土手以下、各年次ごとの調査期間、組織、担当者を記載した。第3表は年度ごとの調査順に記載しているため、掲載順が異なる。

整理作業

| | | |
|--------|----------|----------------------|
| 平成28年度 | 文化財センター長 | 上守秀明 |
| | 整理課長 | 山口典子 |
| | 整理期間 | 平成28年8月1日～平成29年3月28日 |
| | 整理内容 | 水洗・注記～報告書印刷・刊行 |
| | 整理担当者 | 首席文化財主事 池田大助 |

第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と周辺地形（第2・3図・第2表）

今回報告する野馬土手が所在する流山市・柏市は千葉県北西に位置し、東京湾に注ぐ江戸川に沿って立地する。市域の西は江戸川沿いの地が広がり、東部域は高低差のある台地が広がり下総台地へと続き、標高14m～18m程度の平坦な台地が広がる。台地上には、野馬土手のほか旧石器時代～中世に至る数多くの遺跡が広がる。

これらの遺跡を支える主な水系としては、江戸川から樹枝状に入る小支谷を形成する大堀川と坂川（逆川）がある。大堀川は柏市大青田付近および流山市江戸川台付近を湧水地とし、十太夫・駒木野馬土手の中央部を通り手賀沼へと下ってゆく。また市野谷駒木野馬土手域には、現おたかの森駅付近を源流とする湧水地が存在し、牛飼沢を通り、坂川として松戸市から市川市に至り、江戸川に注いでいる。坂川は、近世の新田開発における主要な給水路として地域の発展を支えるとともに、大規模洪水により暴れ川としても知られる。

2 遺跡の歴史的環境

今回報告の対象となる遺跡は、十太夫野馬土手および駒木野馬土手・市野谷駒木野馬土手と呼ばれる野馬土手である。

これらの野馬土手は江戸幕府直轄の「小金五牧」のうち「上野牧（かみのまき）」「高田台牧（たかだだいまき）」とされる区域に所在する。旧水戸街道から日光街道東往還に沿って広がり、現在の地図（第4図）に重ねて見るならば、流山市の台地上及び同じく柏市の西半分を占める地区である。

上野牧は現在の東武鉄道柏駅～江戸川台駅の周辺といったほうがわかりやすいだろうか。日光参詣や水戸街道を用いる大名行列など、浮世絵や日記などにも牧の景観が記されることも多く、往時の広大な牧と、のどかな景観を知ることができる。高田台牧は柏市の西半分、国道16号線より西側、柏の葉キャンパス駅を中心とする。牧は樹枝状の台地上で複雑に入り組むが、柏市と流山市の市境とされる大堀川により、十余二付近から駒木を経て呼塚付近まで、川とその周辺の湿地帯により牧が分けられる。

千葉県を中心とする下総地域は古代より馬の産地として知られ、延喜式によると下総国には諸国牧として「高津馬牧」「夏見馬牧」などが設けられ、軍馬と駅馬の供給を主としていたことが知られる。高津馬牧は現八千代市高津付近、夏見馬牧は現船橋市夏見付近に推定されているが、これらは小金牧のうち「下

野牧」周辺とも地理的にも近く、中世から近世へと続く牧としてこの地が活用されてきたことがうかがえる。中世においては相馬御野、夏見御野などが知られ、これらの存在が関東における武士の興隆に関わったであろうとされている。

徳川家康の江戸入府により江戸幕府が成立し、軍馬の確保、育成を目的として下総地区を中心に牧を設けるにあたり、地域に引き継がれてきたこれらの牧が活用されたものと考えられる。

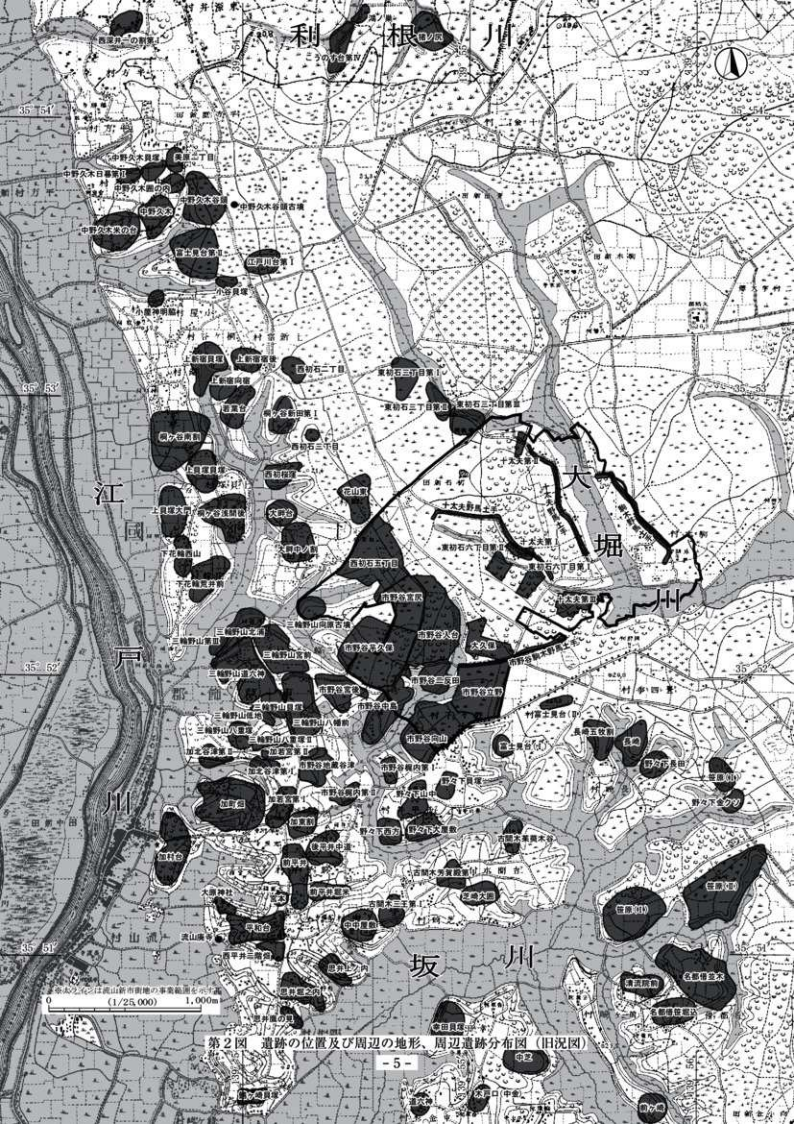
当初は小金七牧として整備が進められたが、江戸市域の拡大による開墾需要や経済的状況などの社会的変化や享保の改革にともなう統廃合が行われ、野田付近にあった「庄内牧」は廃止（1722年）され、鎌ヶ谷の「一本櫛牧」は中野牧に統合されて、高田牧、上野牧、中野牧、下野牧、印西牧の五牧となった。

これらの小金牧の全体像を絵図に示したものが江戸時代中期、寛文12（1672）年に作られたと考えられる「小金牧周辺野絵図」（千葉県文書館蔵）である。施設の管理を目的として作成されたと考えられるこれらの絵図を基に記された牧の総面積はおおよそ16,520haと推定される（宮本 2011年による）。

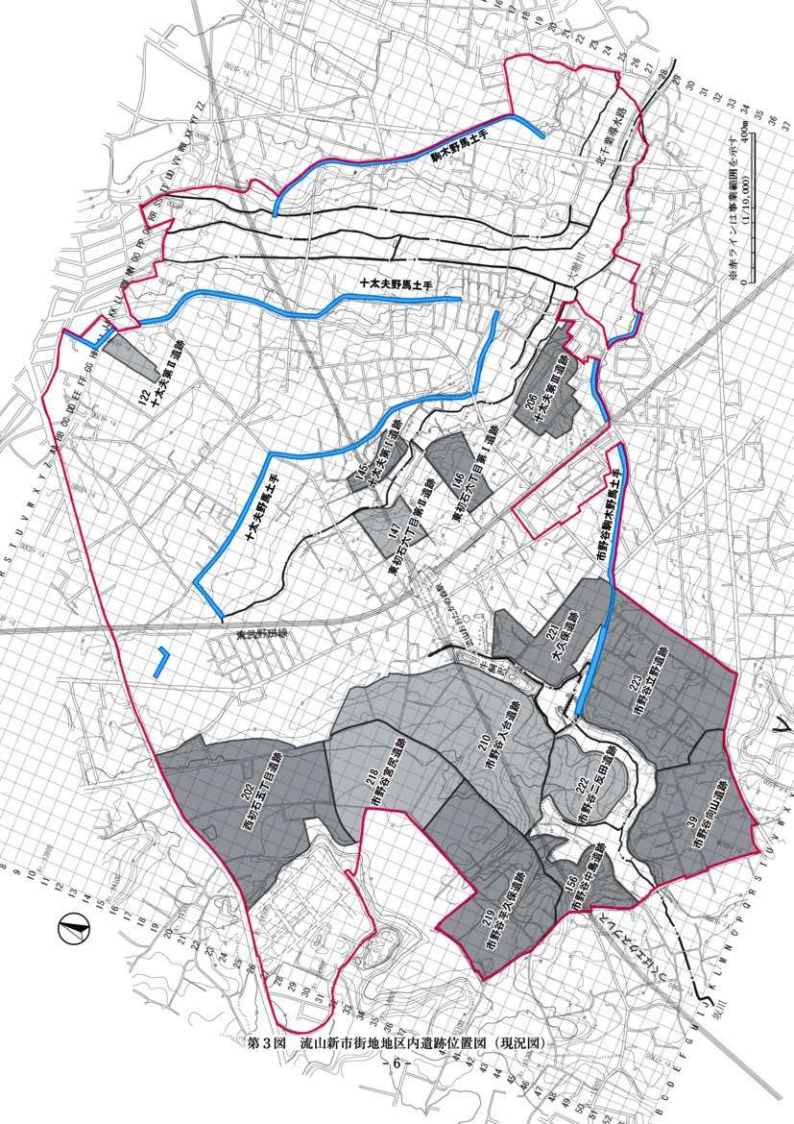
享保7（1722）年、江戸近郊域の開発の進展とともにまず庄内牧が廃止される。この時点で五牧となり総面積は10,426ha、馬数は1,029頭（牝馬数？）と報告されている。その後、江戸幕府の財政の悪化に伴う各種改革や新田開発、江戸の都市域での人口増にともなう薪炭需要の増大、牧用地の周辺集落への払い下げ等により、文久2（1862）年に制作された小金牧絵図（白井市川上家蔵）によると、この約200年の間に牧の総面積は16,520ha（1672年）→10,426ha（1722年）→7,050ha（1869年）と縮小を続け、当初の43%まで縮小している。牧の設置と同時期に開発が開始された利根川の治水工事の進展とともに、新田開発に適した湿地帯の拡大が進み、江戸近郊における新田開発の活発化から旧葛飾郡、現柏市、流山市、野田市付近は絶好の開墾場となった。

庄内牧は、絵図に残される状況から文久2（1862）年までにはほぼすべてが払い下げられて新田が作られている。また印西牧も同じく廃止までには行かないものの、かなりの部分が払い下げられていることが知られる。最終的には明治2（1869）年明治新政府により、江戸市中貧民救済という名目に於ける開墾場として上げ地され、すべての牧が姿を消すこととなった。ただ明治10年代頃まで、野良馬となって開墾地を荒らす馬がいたという（注）、現在のこの地域からは想像のつかない状況が牧の名残をとどめていたともいわれる。

（注）明治6（1873）年、明治天皇は、近衛兵を引き連れ、下野牧で大規模な演習を統監された。演習を実施した一帯を「晋志野之原」と命名し、陸軍の演習場として活用しよう命ぜられたと言われる。それに伴いまだこの地周辺に残される野馬の処置が行われ、『勅諭権頭下総鎌ヶ谷村以東当寮番馬放飼の処御省練兵場開設に付捕馬立入の件』『小金牧之内大野牧捕馬派出官員到着に付野宮へ御通達の件』（明治7年1874）という資料が残される。また鎌ヶ谷地域は「初宮」という地名があるとおり、上げ地され最初に開墾の進んだ地域である。開墾開始から5年後でも、野馬として練兵場・開墾地を荒らす馬がいたという、現在のこの地域からは想像のつかない牧の姿を残していたのである。



第2図 遺跡の位置及び周辺の地形、周辺遺跡分布図(旧況図)



第3図 流山新市街地区内遺跡位置図(現況図)

第2表 新市街地区周辺遺跡一覧

| 県道跡 番号 | 道路名称 | 時 代 | 県道跡 番号 | 道路名称 | 時 代 |
|-----------|-----------|----------------------|-----------|------------|-------------------------|
| 202 | 西初石五丁目道路 | 縄文 | 229 | 恵井上ノ内道路 | 古墳(後)、奈良・平安 |
| 218 | 市野宮瓦葺道路 | 古墳(後)、奈良、平安 | 167 | 中ノ屋敷道路 | 縄文(前・中・後)、平安 |
| 210 | 市野宮瓦葺路 | 古墳 | 36 | 古間本三丁目道路 | 縄文(前)、平安 |
| 219 | 市野宮平久保道路 | 縄文(早) | 226 | 前平井堀米道跡 | 古墳(後)、奈良・平安 |
| 222 | 市野宮二反田道路 | 縄文(前) | 40 | 市野宮内第一道路 | 縄文(前・中)、古墳(中・後) |
| 221 | 大久保道路 | 縄文(前) | 41 | 野々下山中道路 | 縄文(前)、平安 |
| 223 | 市野宮立野道路 | 縄文(前)、古墳(後) | 81 | 野々下貝塚 | 縄文(前・中・後・晩) |
| 29 | 市野宮向山道路 | 縄文(前・中)、古墳(後) | 42 | 野々下西方面 | 縄文(前・中) |
| 156 | 市野宮中島道路 | 縄文(前・中)、平安 | 43 | 野々下大屋敷道路 | 縄文(後)、平安 |
| 220 | 市野宮後道路 | 縄文 | 158 | 古間本芳賀段第一道路 | 縄文(前・中)、平安 |
| 208 | 三輪野山向原古墳 | 縄文(前)、弥生、古墳(前) | 159 | 嵯峨大田道路 | 縄文(前・中)、古墳、平安 |
| 203 | 花山東道路 | 旧石器、縄文、奈良、平安 | 82 | 古間本東末谷道跡 | 縄文(早・前・後) |
| 152 | 大町中ノ割道路 | 縄文(早・前・中)、平安 | 33 | 鱒ノ堀貝塚 | 縄文(早・中・後)、平安 |
| 29 | 下在輪荒井前道路 | 弥生、古墳、平安 | 198 | 美原二丁目道路 | 縄文(前)、近世 |
| 209 | 下在輪西山道路 | 縄文、古墳、中世 | 17 | 中野久木貝塚 | 縄文(早・前・中) |
| 28 | 榎ヶ谷茂間後道路 | 旧石器、縄文(前・後)、平安 | 114 | 中野久木第1道路 | 縄文(後) |
| 80 | 大町台道路 | 縄文(前)、古墳、中世 | 75 | 中野久木谷頭道跡 | 縄文(中)、古墳 |
| 27 | 上貝塚大門道路 | 縄文(前・後)、平安 | 123 | 中野久木堀の内道路 | 縄文(前・中)、平安 |
| 26 | 上貝塚貝塚 | 縄文(前・中・後) | 18 | 中野久木道跡 | 縄文(早・前・中・後)、古墳(中) |
| 136 | 西初石塚道跡 | 縄文(前・中・後)、近世 | 139 | 中野久木末の台道跡 | 縄文(前・中・後)、平安 |
| 24 | 榎ヶ谷南割道跡 | 旧石器、縄文、古墳(中)、平安 | 20 | 富士見台第1道路 | 奈良・平安 |
| 130 | 若菜台道跡 | 旧石器、縄文(前・中) | 205 | 中野久木谷頭古墳 | 古墳 |
| 135 | 榎ヶ谷新田第一道跡 | 旧石器、縄文、平安 | 137 | 江戸川台第1道跡 | 縄文(後)、中近世 |
| 195 | 西初石三丁目道路 | 縄文(前・中・後・晩) | 21 | 小谷貝塚 | 縄文(中)、平安 |
| 129 | 上新宿向宿道跡 | 縄文(前・中) | 201 | 小塚神明通道跡 | 縄文(前・後)、近世 |
| 23 | 上新宿貝塚 | 縄文(後・晩) | 119 | 東初石三丁目第一道跡 | 縄文(晩) |
| 127 | 上新宿後道跡 | 縄文(前・後)、平安 | 120 | 東初石三丁目第二道跡 | 縄文(早)、古墳(後)、平安 |
| 134 | 西初石二丁目道路 | 縄文(中・後) | 121 | 東初石三丁目第三道跡 | 縄文(早)、平安、近世 |
| 79 | 三輪野山第Ⅲ道跡 | 縄文、古墳(後)、平安、近世 | 122 | 十太夫第Ⅱ道跡 | 縄文(前)、平安、近世 |
| 78 | 三輪野山北通道路 | 旧石器、縄文(前・後)、古墳、平安、近世 | 145 | 十太夫第Ⅰ道跡 | 縄文(中・後)、平安、近世 |
| 211 | 三輪野山六神道跡 | 縄文、古墳、平安、近世 | 164-1 | 富士見台(Ⅰ)道跡 | 不明 |
| 154 | 三輪野山宮前道跡 | 縄文(前)、古墳(後)、平安、近世 | 164-2 | 富士見台(Ⅱ)道跡 | 縄文(中・後) |
| 153 | 三輪野山八幡前道跡 | 縄文、古墳、平安、近世 | 149 | 長崎五教園道跡 | 縄文(前・中)、平安 |
| 31 | 三輪野山貝塚 | 旧石器、縄文(前・中・後・晩) | 51 | 長崎道跡 | 縄文(早・前・中・後) |
| 213 | 三輪野山臥地道跡 | 縄文(後・晩) | 55 | 野々下長田道跡 | 縄文(早・前・中・後) |
| 185 | 三輪野山八家塚 | 縄文、古墳、平安 | 57 | 野々下御成道跡 | 縄文(前・中) |
| 197 | 三輪山八家塚Ⅱ道跡 | 縄文(早)、平安 | 58 | 野々下金クソ道跡 | 縄文(前・中) |
| 190 | 加若宮第Ⅱ道跡 | 縄文、平安 | 168-1 | 笹原(Ⅰ)道跡 | 縄文(中)、弥生、古墳 |
| 188 | 加北谷津第Ⅰ道跡 | 旧石器、縄文、平安 | 168-2 | 笹原(Ⅱ)道跡 | 縄文(中) |
| 189 | 加北谷津第Ⅱ道跡 | 旧石器、縄文、平安 | 66 | 名都借基木道跡 | 縄文(前) |
| 186 | 加所畑道跡 | 縄文、古墳、奈良、平安 | 162 | 清波院前道跡 | 縄文(前)、平安、近世 |
| 90 | 加村台道跡 | 弥生(中)、古墳(後)、平安、近世 | 67 | 名都借基坂込道跡 | 縄文(前・中)、平安 |
| 187 | 加若宮第Ⅰ道跡 | 旧石器、縄文、平安 | 109 | 西深井一の領第一道跡 | 旧石器、縄文、奈良、平安、中近世 |
| 215 | 市野宮地蔵谷ノ道跡 | 古墳(後)、平安 | 98 | こうの台第Ⅳ道跡 | 縄文(早・前・中・後) |
| 224 | 市野宮内第二道跡 | 縄文 | 200 | 浦ノ塚道跡 | 縄文(早・前・中・後) |
| 212 | 加東割道跡 | 縄文(前)、中近世 | 191 | 猪ノ尻道跡 | 縄文(早) |
| 225 | 後平井中島道跡 | 古墳(後)、奈良・平安 | 1 | 幸田貝塚 | 旧石器、縄文(前・中・後)、古墳 |
| 32 | 前平井道跡 | 縄文(前・中)、平安 | 2 | 中芝道跡 | 弥生(後)、古墳(前・中・後) |
| 204 | 宮本道跡 | 縄文(早)、平安 | 4 | 道六神道跡 | 縄文(早・前・中・晩)、弥生(後)、奈良・平安 |
| 184 | 大原神社道跡 | 縄文(早)、古墳(後)、平安 | 3 | 木戸Ⅰ(中倉)道跡 | 縄文(前)、古墳(中) |
| 170 | 平和台道跡 | 縄文(中)、古墳、平安、中近世 | 69 | 前ノ堀貝塚 | 縄文(前・中・後) |
| 47 | 嵐山院寺道跡 | 奈良 | 206 | 十太夫第Ⅲ道跡 | 縄文、平安 |
| 228 | 西平井二階畑道跡 | 縄文、古墳(後)、奈良・平安 | 146 | 東初石6丁目第一道跡 | 縄文(中晩)、平安 |
| 169 | 恵井堀ノ内道跡 | 縄文(中)、平安 | 147 | 東初石6丁目第二道跡 | 縄文(後晩)、平安 |
| 193 | 恵井堀の足道跡 | 縄文(早・前)、古墳、近世 | | | |

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 野馬土手の調査

野馬土手も明治時代以降の開墾、開発により削平され、その存在を残さない部分も多々見受けられたが、これらの開墾や市街化から残されて、旧状を知ることのできる地点も多く見られた。今回の調査区内には野馬土手として残されるものは多かったが、牧としての主要な施設となるような地点は見られなかった。

周辺において伝えられる牧としての施設については、伝承や地名から知られるものとしては「捕込」があげられる。上野牧の捕込は、「柏市豊四季字捕込」という地名から、現在の千葉県柏市柏第二小学校付近にあったと伝えられている。高田台牧については柏市十余二工業団地付近とされている。この両地点は、「小金上野高田台兩御牧大凡図」（流山市鑄木亮家文書）に概要が記され、また「小金原勝景絵図」には上野牧の捕込が描かれており旧観を知る手掛かりとなる。水飲み場は、「東深井新田絵図」（流山市酒巻富子家文書）記載の流山市東深井地先、同絵図記載の柏市大青田字猪之尻などがあげられる。伝承地として流山市初石地先や流山市市野谷字牛飼沢などが想定されている。牛飼沢は低地かつ湧水地点ともなっており、十分に想定し得る場所である。今回の調査範囲内のうち市野谷・駒木野馬土手調査地点周辺である。

今回の調査は平成12年に着手し、平成26年度まで全30次にわたり、遺存するほぼ大半について地形測量およびトレンチによる断面観察を実施した。用地確保の都合上、調査順序が連続していないが、個々の概要については第3表に調査年次順に調査状況を掲載した。なお、測量図・断面実測図は調査年次に問わず、各野馬土手の最北部より連続して掲載した。

1 十太夫野馬土手（第3表・第4・5・6図～35図、図版2～6）

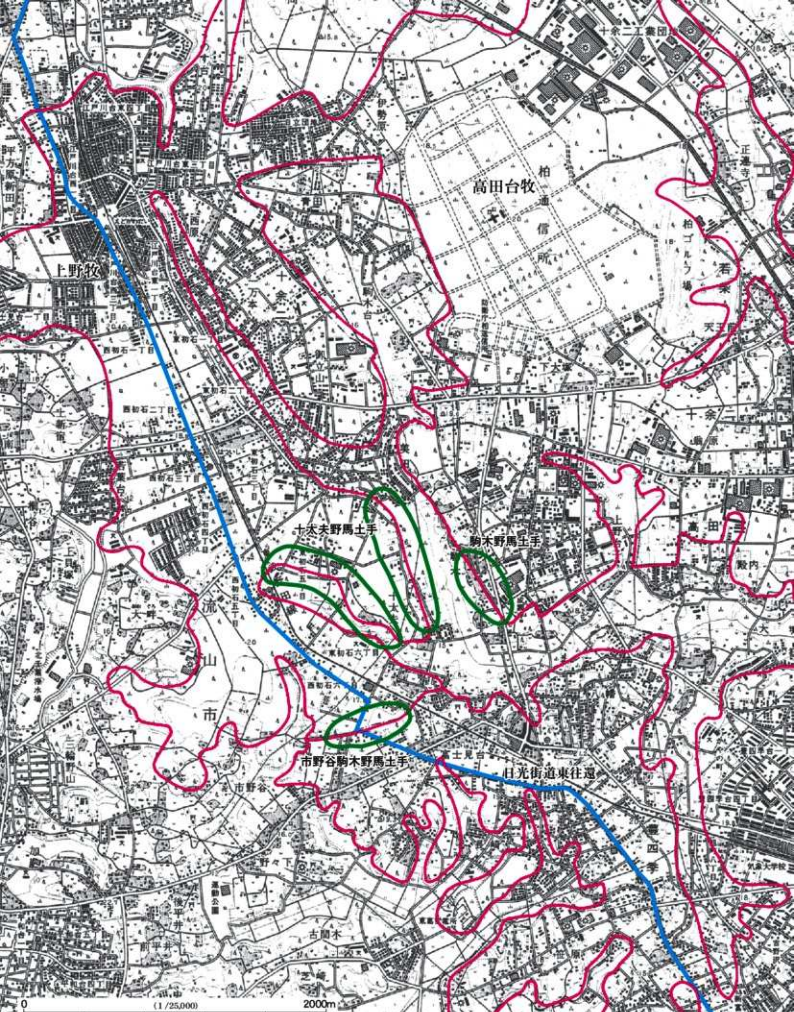
今回調査を行った上野牧（内）十太夫野馬土手は、流山市駒木付近の大堀川西岸に沿って北上する1条（第5図A～B・調査対象区全長1,120m）と、同地点より西に向かい、途中で大きく屈曲し日光東往還に向かう1条（第5図C～D・調査対象区全長1,325m）が対象となった。本来はこれらは連続する野馬土手であったと想定される。（第4図）

遺存状況は地点により大きく異なるが、基本的には野馬土手幅4m～5mを基準に遺存する。最良の地点で野馬土手高2.5mを測る。野馬堀は基本的に土手外周に1条伴う。おおむね幅2m～3m、掘り込みは1.5m～2.5mと土手の高さと同比例するように深く掘られる。なお野馬堀は部分的に土手内外に2条みられるものの、2条になる位置が野馬土手内の何らかの施設に伴うような状況は確認できなかった。元禄9（1696）年～15（1702）年作成の「元禄国絵図・下総図」に青田・駒木の新田、日光街道沿いの十太夫新田が記され、牧に入り込んだ新田がすでにあつた事を示す絵図が残されていることを考えると、大堀川あるいは近隣における水田や畑など開墾場への野馬の侵入対策用の土手なのであろうか。調査時点で数か所土手の切れる部分が見受けられたが、土手築造後に周辺の開墾に伴い設けられたものか、当初から存在していたものか不明である。

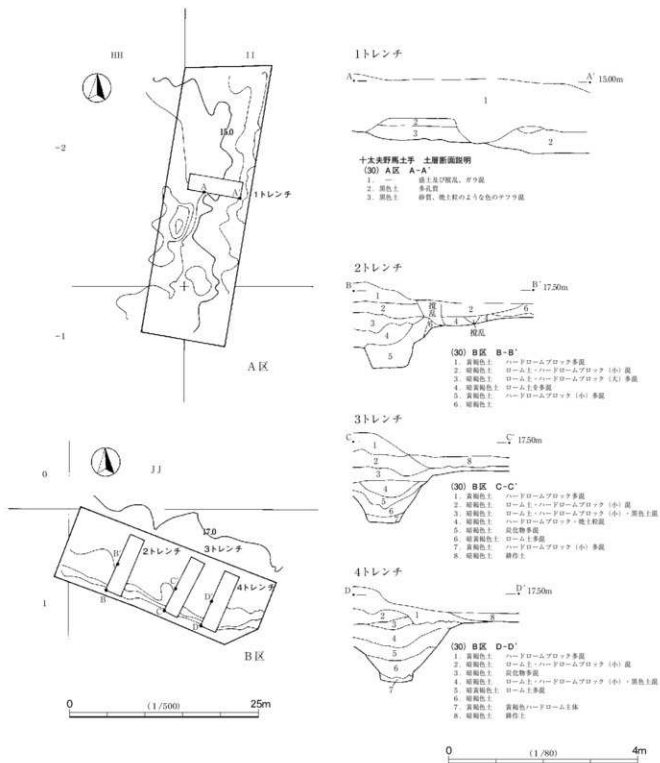
調査区内からはその他の遺構として、十太夫野馬土手3-(24)調査区より土坑（SK-001）が1基検出された（第8図）。

長径2.2m、短径1.4m、確認面から底面までは約2mを測る。平面形は隅丸方形である。遺物などの出

| 年度 | 調査 回数 | 対象 面積 (㎡) | 採種圃 番号 | 採種 番号 | 採種 番号 | 全長(調査区内) | | 土 | | 溝 | | 調査期間 | 所在地 | 調査区 区見 |
|------|----------|-----------------|-----------|----------|----------|--------------------|--------------|------------|-----------|------------|-----------|------------------------------|---------------------------|---|
| | | | | | | 土手を 確認できた 長さ | 想定され る土手長 | 高さ (最大) | 幅 (最大) | 深さ (最大) | 幅 (最大) | | | |
| 平成20 | 19 | 1,250㎡ | 20-19 | 33 | - | 145m | - | 2m | 3m | 25m | 4m | 2008/8/12 ~ 2008/8/13 | 嵐山市十太夫 15-6の一部 ほか | 二重の野馬土手が検出された。南側土手は概約5mの土手がなり、北側土手は約4mの土手が約3m程度であった。両土手に挟まれている間は概約4mの隙間が残る。遺存状態は概ね良好であった。調査区東端と西端は築堤により南側土手と繋がっている。こちらには土手の最大幅8mを測る。北側土手は調査区外道路により削り落されており、隙間は道路下に入るため調査し難かった。中央部に土手の遺存部分が見られるが、土手が受けられた可能性のある部分であった。 |
| 20 | 20 | 940㎡ | 5-(20) | 9 | 2 | 96m | - | 1.6m | 4m | 1.4m | 1.6m | 2006/9/1 ~ 2006/9/5 | 嵐山市十太夫 16の一部ほか | 大塚川沿いの野馬土手である。土手幅は約4mを測る調査区中央部に土手が認められているが、周辺の小溝による通過と想定された可能性が高い。土手東側に溝が3条検出されているが土手と土手間に約約2mの隙が見られる。これが本来の土手に伴ったものであろう。他の溝は河川の崩壊に伴う可能性が高い。 |
| 平成21 | 21 | 800㎡ | 13-(21) | 17 | 4 | 80m | - | 0.5m | (2m) | (2m) | 0.5m | 2009/4/20 ~ 2009/4/28 | 嵐山市西野石 170-1の一部 ほか | 日光東照宮道にむかう野馬土手である。野馬土手は盛り土が完成し現地表から50cm~1m程度と遺存状況はあまりよくはないが、土手、溝ともにおおむね同じ高さで設けられ土手幅~土手幅と2重に併走している。 |
| 21 | 22 | 2,028㎡ | 8-(22) | 12 | 3 | 50m | 100m | - | (3m) | 1m | 2m | 2009/6/1 ~ 2009/6/17 | 嵐山市十太夫 16-2の一部ほか | 調査対象地のうち、調査区内の2重の野馬土手は狭平され、調査区北端にのみ残る。調査区北側100m~130mは築堤により、残存がほとんどないが約2m~3mの土手基部と想定されている部分と、全調査区(調査部分含む)と土手(溝跡)に沿って約2mの溝を測る。土手幅は概約1mの幅で検出された。第3トレンチでは溝の掘り直しが確認できた。 |
| 21 | 23 | 580㎡ | 30-(23) | 24 | - | 62m | - | 2m | 5m | 25m | 3m | 2010/2/22 ~ 2010/2/26 | 嵐山市十太夫 127-3の一部 ほか | 本地点においては野馬土手はその由来に高い形状を保持していた。また、土手野馬土手は掘り直されず残っていた。西側に検出するものは(17)であるが、後継部分は窪みなどにより野馬化していた。現在は土手表で前面で約3m、裏面でおおむね1mを測る。土手幅は概約1mの幅で検出された。第3トレンチでは道路に切り取られた可能性があり、明確な痕跡は残っていない。 |
| 平成22 | 24 | 203㎡ | 3-(24) | 7 | 2 | 38m | - | - | - | 1.8m | 2.8m | 2010/7/1 ~ 2010/7/8 | 嵐山市十太夫 157の一部 ほか | 調査区全長は38mであるが、野馬土手は確認できず、調査区北端にのみ土手と溝を確認した。本調査地点南側は(14)、北側は(25)地点であり、ともに良好な状態の野馬土手を確認しており、土手幅は概約1mの幅で検出された。調査区外より築堤と想定される土手を確認した。長径1.8m、短径1.4m、深さは2mを計る。遺物は検出されておらず、野馬土手は不明。 |
| 22 | 25 | 660㎡ | 2-(25) | 6 | 2 | 70m | - | 1.6m | 2m | 2m | 1.8m | 2010/11/15 ~ 2010/12/8 | 嵐山市十太夫 157の一部 ほか | A・B区に分かれる。野馬土手が北西方向に崩壊する部分にある。調査区は図上で見るとおり南東に分離し、中間部分は宅により取り除かれている。北側、土手は調査区に崩壊するが、道路下に伸びる野馬土手1番及び11番が確認された。西側部分では約約2mで内側に崩壊する土手が検出された。掘り直しの痕跡は西側にのみ見られ、遺物などには関係ない。伝承など不明なため、築堤などに関与し、ずれほかの築堤であろうが不明とせざるを得ない。 |
| 22 | 26 | 1,066㎡ | 26-(26) | 30 | 6 | - | 60m | 2m | 3m | 13m | 2m | 2011/2/1 ~ 2011/2/16 | 嵐山市十太夫 105-16ほか | 堤防の崩壊痕跡と併用し、土手幅は大きく削り残されている。南に築堤する(19)は既に削り落されていた。本地点の北側は(13)になる。北側に沿って土手は良好な状態で遺存し、現在は土手東側に併走している。 |
| 22 | 27 | 660㎡ | 21-(22) | 25 | 5 | 70m | - | - | (3m) | 1.5m | 3m | 2011/2/17 ~ 2011/2/24 | 嵐山市十太夫 170地先ほか | 北土上ってきた野馬土手は本地点で傾斜し西に向かう。南側は(12)西側は(23)である。北土上野馬土手は(13)付近より良好な状態で遺存しており、(12)で野馬土手と繋がっている。土手幅は概約1mの幅で検出された。本調査区においてはほぼ全域が削り落されており、溝の遺留物はローマ層上面からのものである。 |
| 平成23 | 28 | 1,488㎡ | 24-(28) | 28 | 5-6 | 140m | - | (1m) | 5m | 23m | 3m | 2011/11/1 ~ 2011/11/15 | 嵐山市十太夫 182の一部 ほか | 北側は(5)南側は(13)に続く。遺存状況は良好な野馬土手が残る。本地点西側は土手の削り落が見られたが、土手内を掘り直した痕跡は確認できた。北側には名瀬と繋ぐ。最大幅3m、深さ2.5mを測ることができた。 |
| 平成27 | 29 | 632㎡ | 30-(29) | 34 | 6 | 60m | - | 1.5m | 3m | (2m) | (3m) | 2015/6/10 ~ 2015/6/11 | 嵐山市十太夫 125-6の一部 ほか | 西に(19)が連続し、今回調査区の前端である。野馬土手の遺存状況は良好であったが(19)で見られた土手の野馬土手がこちらへ傾いているのは確認できなかった。土手幅は概約約3m~4m、現在は土手北側に約2m~3mの溝で併走しているのが確認された。道路下に続くため全幅および深さは確認し難かった。 |
| 27 | 30 | 780㎡ | 1-(30) | 5 | 2 | 10m | 54m | 1m | 2m | 12m | 1m | 2016/2/17 ~ 2016/2/23 | 嵐山市十太夫 119-73の一部 ほか | 今回調査された十太夫野馬土手(1号)は北側にあった。大手が削り落されており道路下に崩壊している。A・B区に分かれる。本調査区は周辺の野馬土手と併走部分から確認し、トレンチを設けた。周辺の地盤面は大部分に本調査区野馬土手が存在した可能性が高く、道路下に野馬土手と思われる遺物の遺留物が一部確認された。(北)区は大きく崩壊するものも想定されることがあるが、確認し、トレンチは土手あるいは崩壊の痕跡をも確認することはできなかった。 |
| | | 21,622㎡ | | | | 1,657m | 214m | | | | | | | |

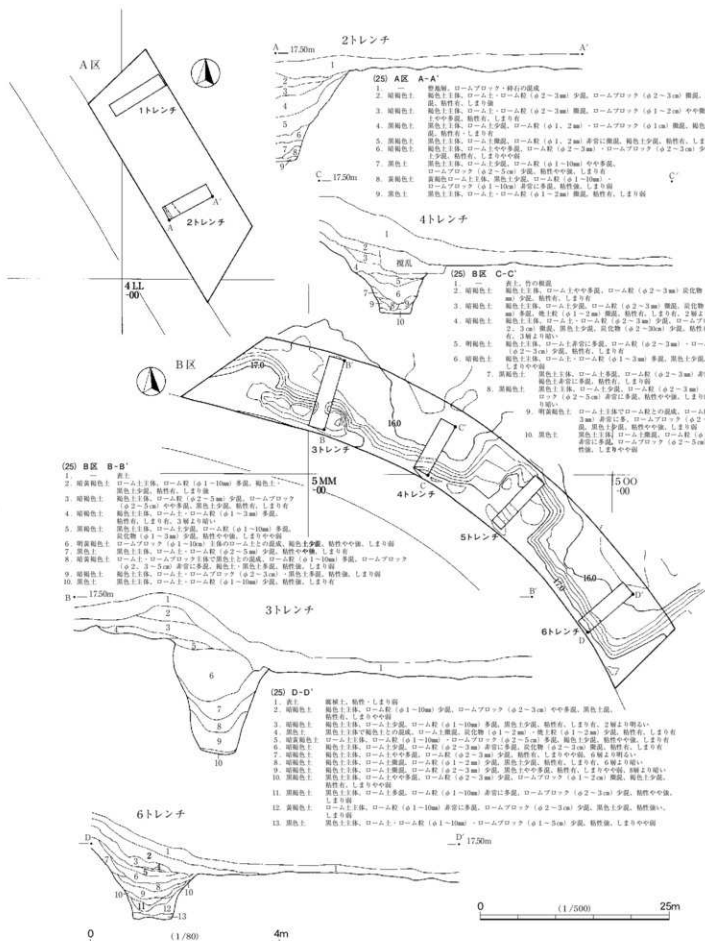


第4圖 上野牧及び高田台牧範圍概要圖 (1/25,000)

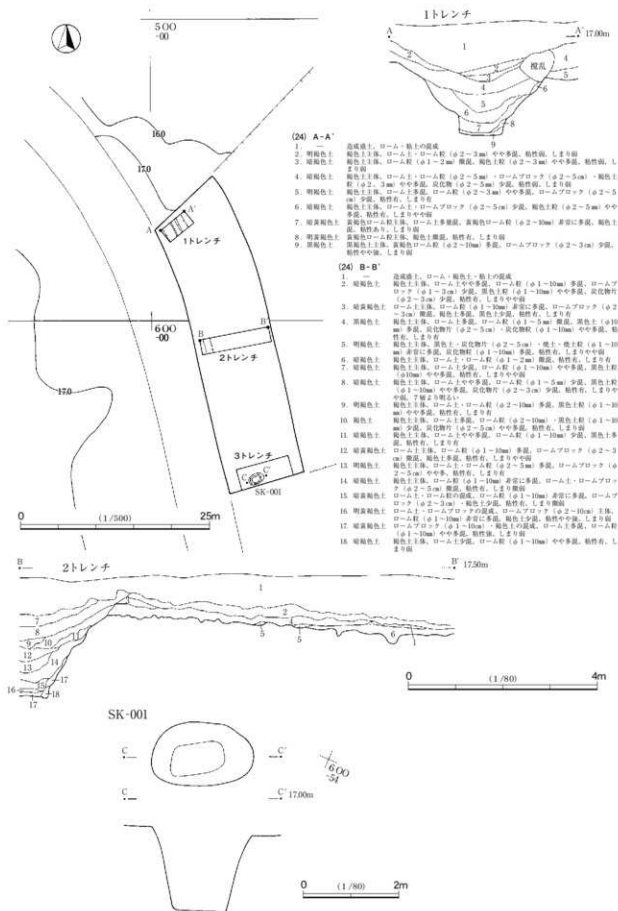


第6図 十太夫野馬土手1 - (30) A区・B区

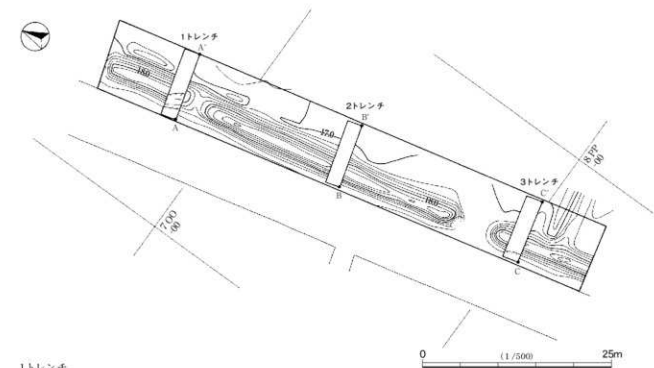
土はなく、構築された時期などは不明であるが、周辺の遺跡からの出土状況から鑑み、縄文時代の陥穴と思われる。



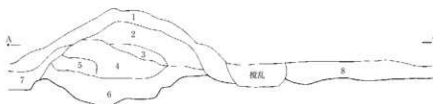
第7図 十太夫野馬土手2-(25) A区・B区



第8図 十太夫野馬土手3-(24)



1トレンチ



1/1750m

- (14) A-A'
1. 表土
 2. 暗褐色土
 3. 暗赤褐色土
 4. 黄褐色土
 5. 暗黄褐色土
 6. 暗褐色土
 7. 暗褐色土
 8. 暗褐色土

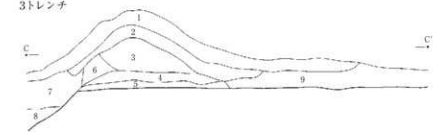
2トレンチ



1/1750m

- (14) B-B'
1. 表土
 2. 暗褐色土
 3. 暗赤褐色土
 4. 黄褐色土
 5. 暗褐色土
 6. 黄褐色土
 7. 暗褐色土
 8. 暗褐色土

3トレンチ

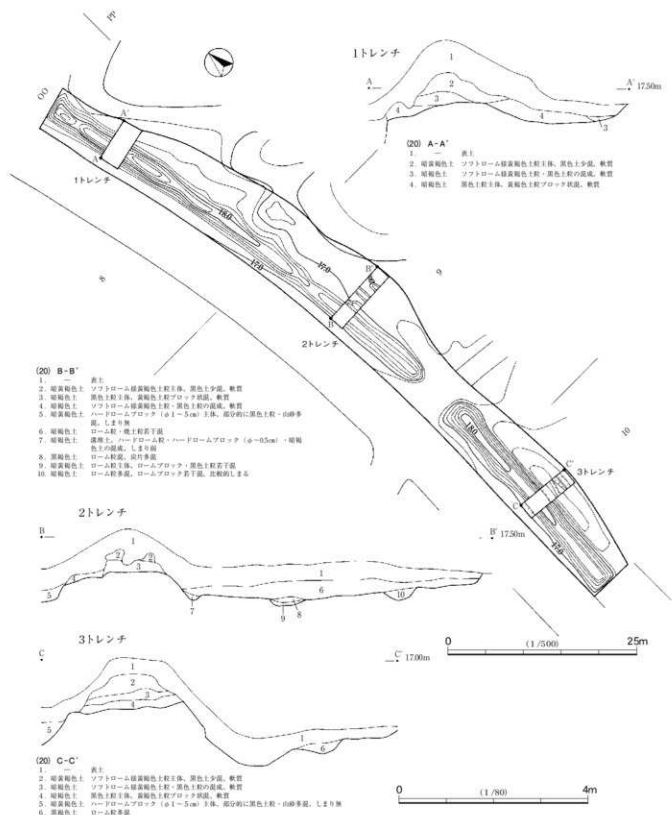


1/1750m

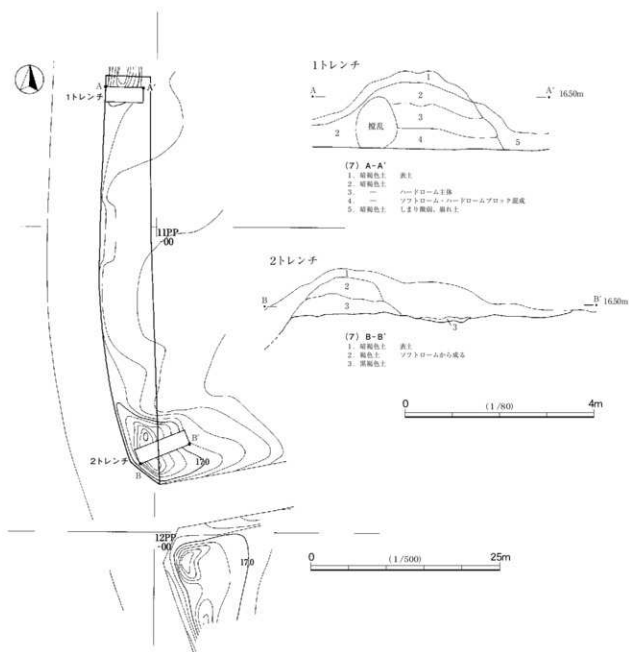
- (14) C-C'
1. 表土
 2. 暗褐色土
 3. 黄褐色土
 4. 暗褐色土
 5. 黄褐色土
 6. 暗褐色土
 7. 暗褐色土
 8. 暗褐色土
 9. 暗褐色土



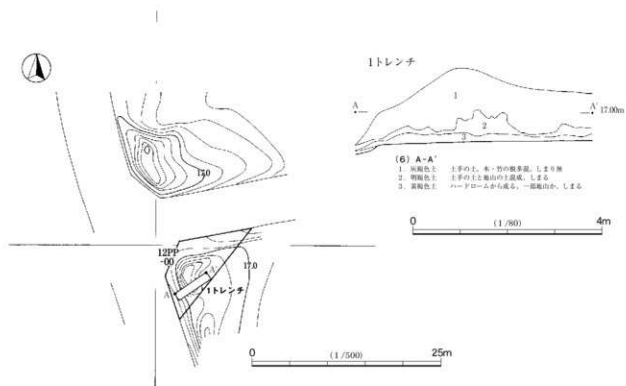
第9図 十太夫野馬土手4-(14)



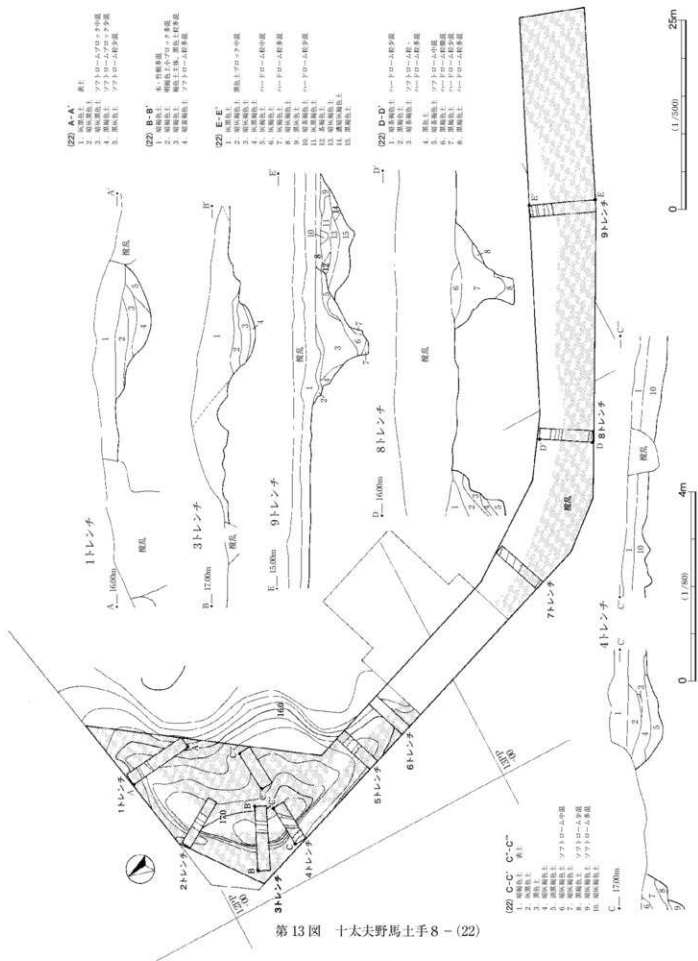
第10図 十太夫野馬土手5-(20)



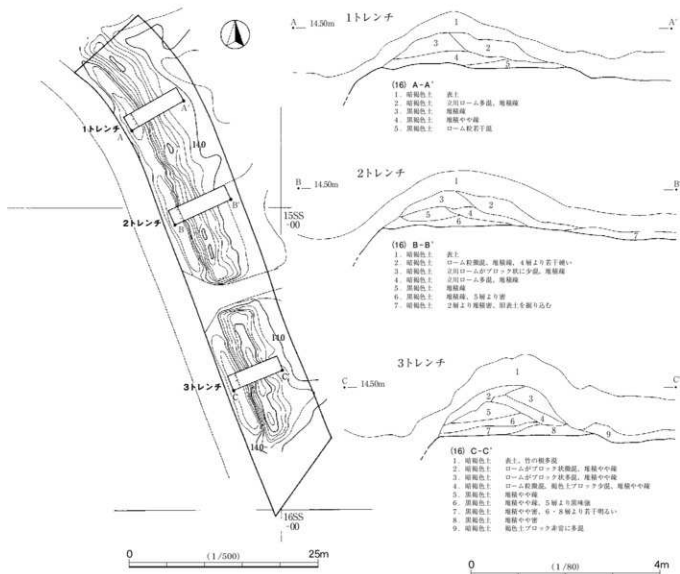
第11図 十太夫野馬土手6-(7)



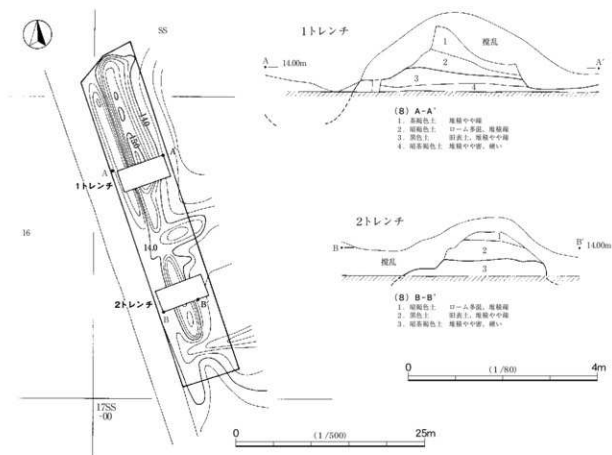
第12図 十太夫野馬土手7-(6)



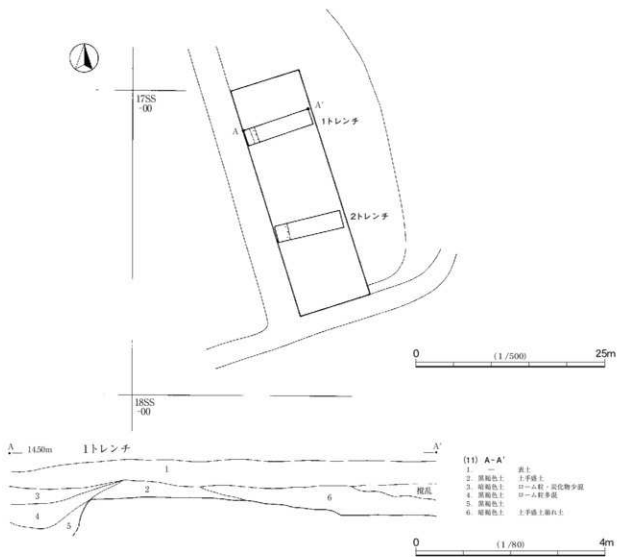
第13図 十太夫野馬土手8-(22)



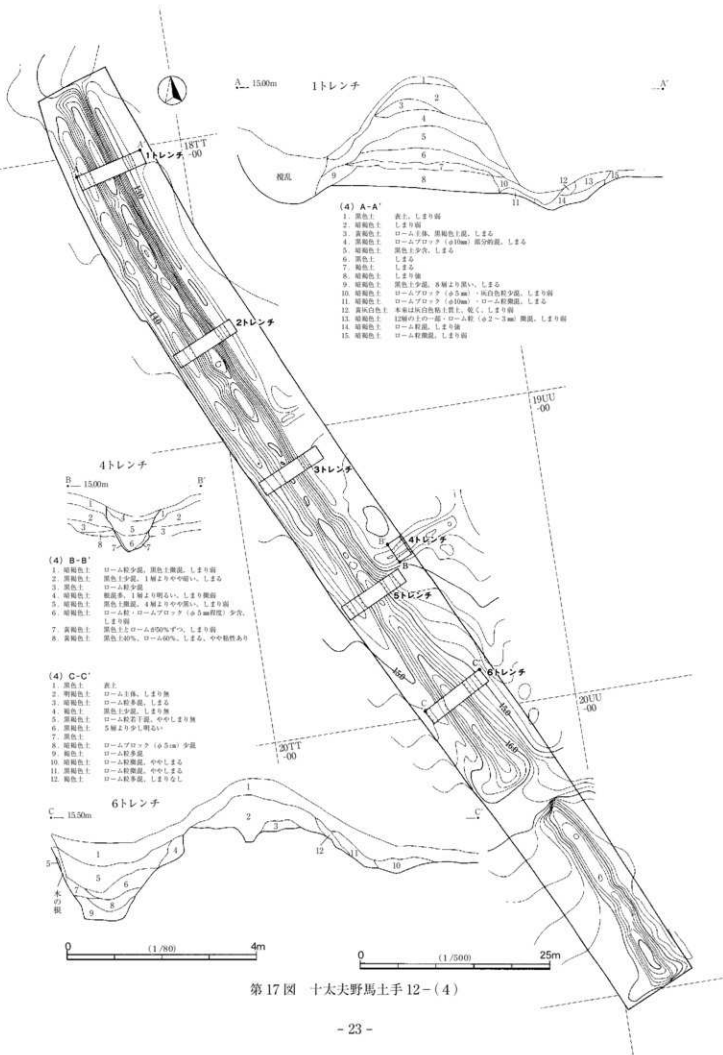
第14図 十太夫野馬土手9-(16)



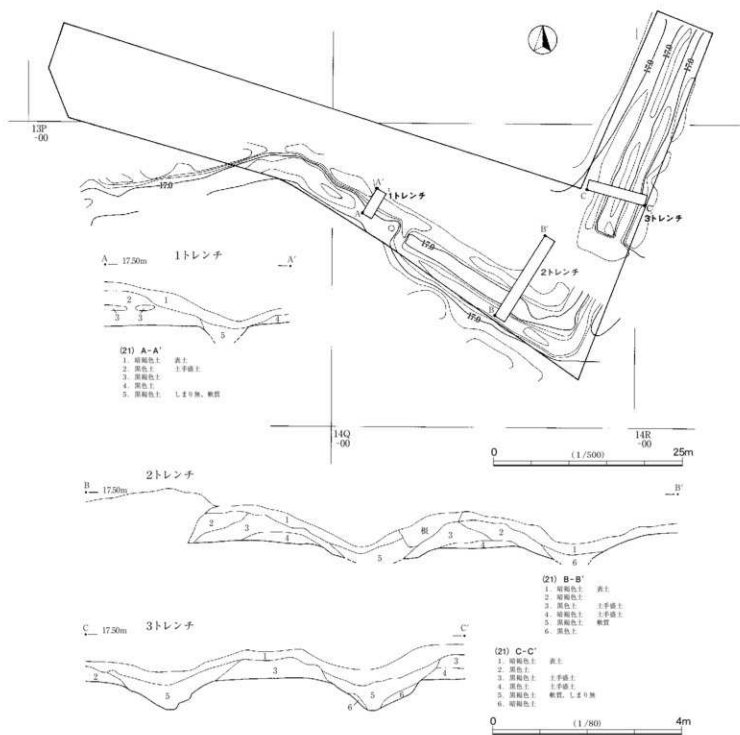
第15図 十太夫野馬土手10-(8)



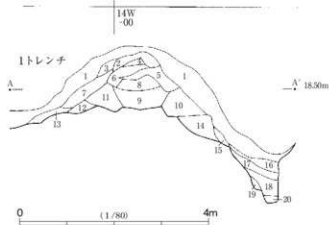
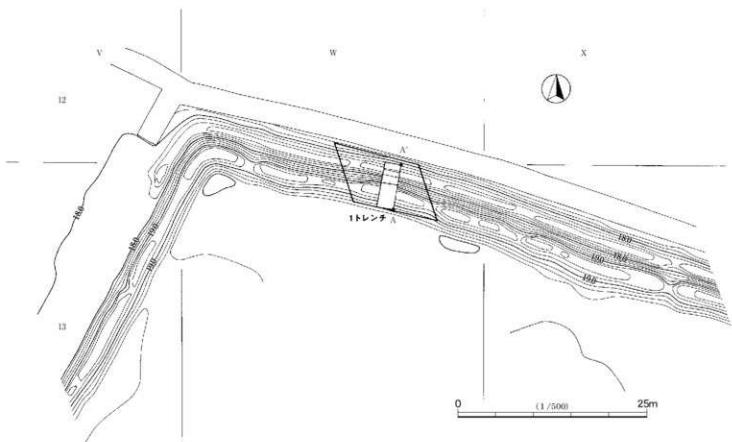
第16図 十太夫野馬土手11-(11)



第17図 十太夫野馬土手12-(4)



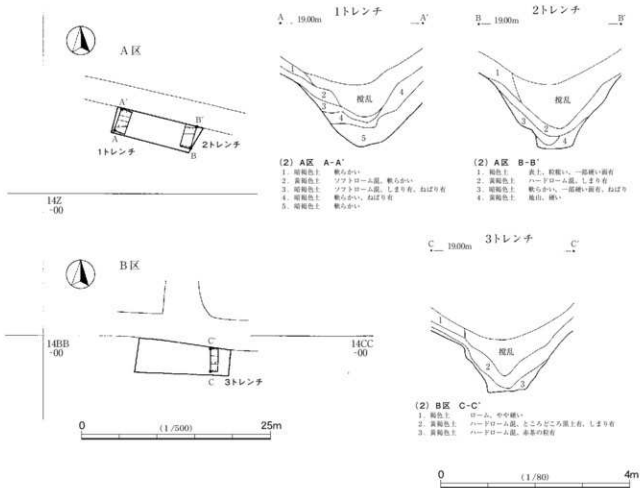
第18図 十太夫野馬土手13-(21)



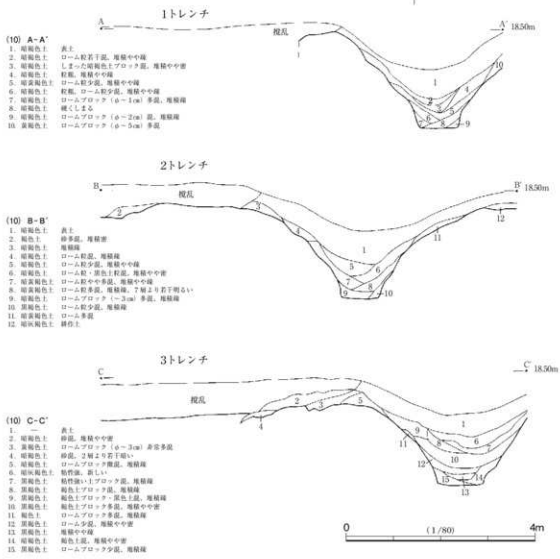
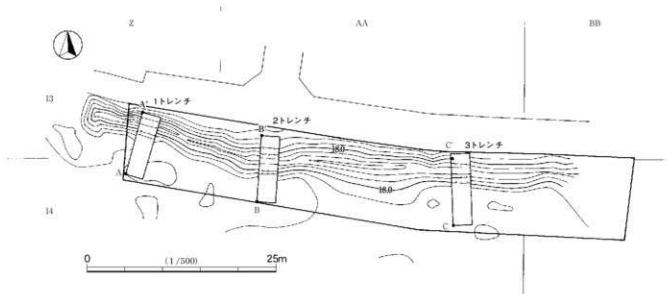
十太夫野馬土手 土層断面説明

- (1) A-A'
- | | | |
|-----|------|-------------------|
| 1. | 暗褐色土 | 表土 |
| 2. | 明褐色土 | ローム砂層 |
| 3. | 褐色土 | ローム砂層 |
| 4. | 黒色土 | |
| 5. | 暗褐色土 | |
| 6. | 暗褐色土 | 5層より明い、ややしまる |
| 7. | 暗褐色土 | 6層より明い |
| 8. | 暗褐色土 | ロームブロック土塊、ややしまる |
| 9. | 暗褐色土 | ローム小ブロック土塊土混成、しまる |
| 10. | 暗褐色土 | ローム砂層 |
| 11. | 暗褐色土 | ローム柱土塊、しまる |
| 12. | 暗褐色土 | ローム砂層、しまる |
| 13. | 暗褐色土 | しまり層 |
| 14. | 暗褐色土 | 11層に似る |
| 15. | 暗褐色土 | ローム砂層 |
| 16. | 暗褐色土 | 深味層 |
| 17. | 暗褐色土 | ローム砂層 |
| 18. | 褐色土 | ローム砂層、しまる |
| 19. | 暗褐色土 | 堀山ローム層 |
| 20. | 暗褐色土 | |

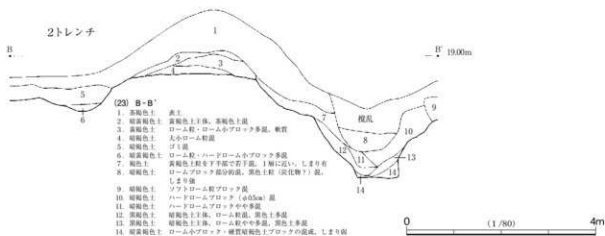
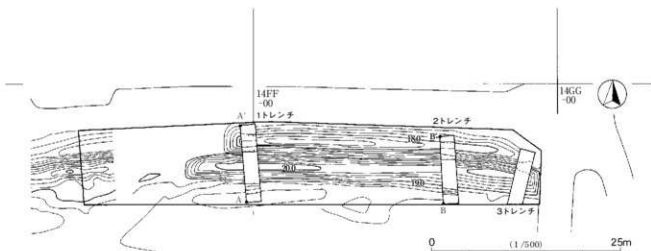
第20図 十太夫野馬土手15-(1)



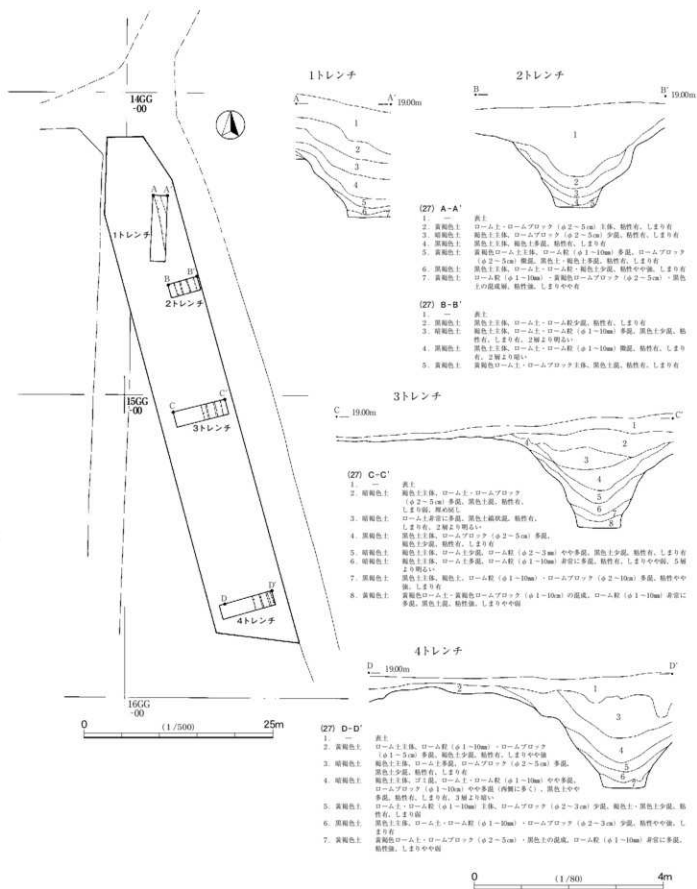
第21図 十太夫野馬土手16-(2) A区・B区



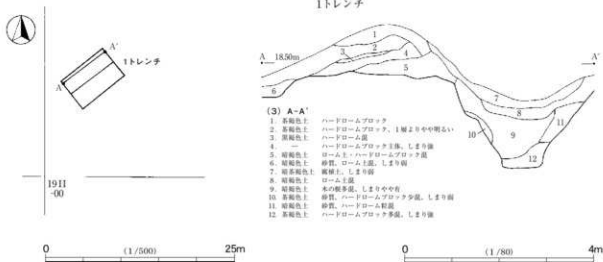
第22図 十太夫野馬土手17-(10)



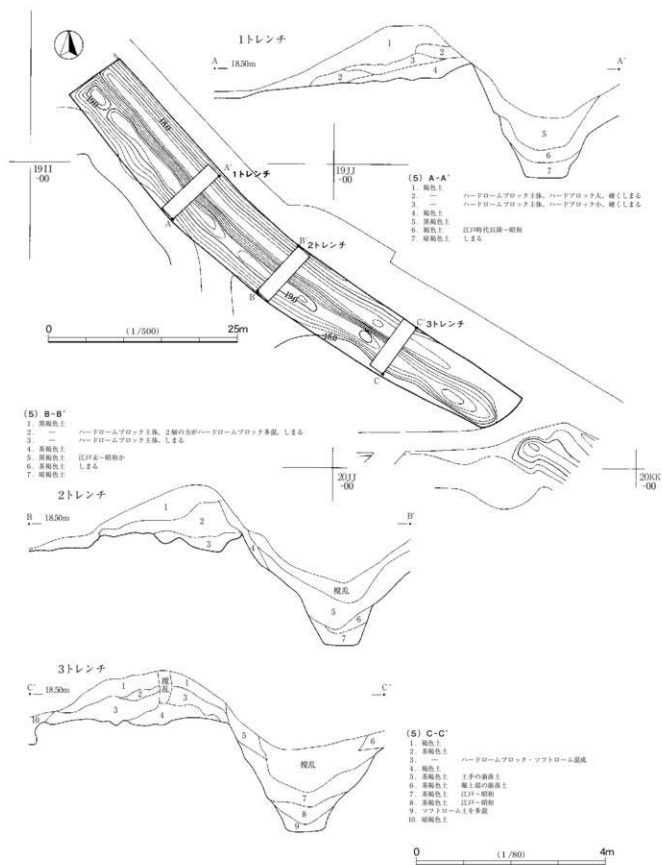
第24図 十太夫野馬土手19-(23)



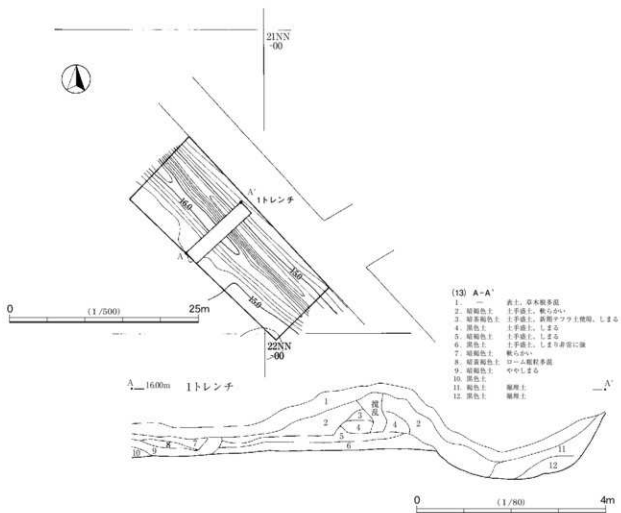
第25図 十太夫野馬土手20-(27)



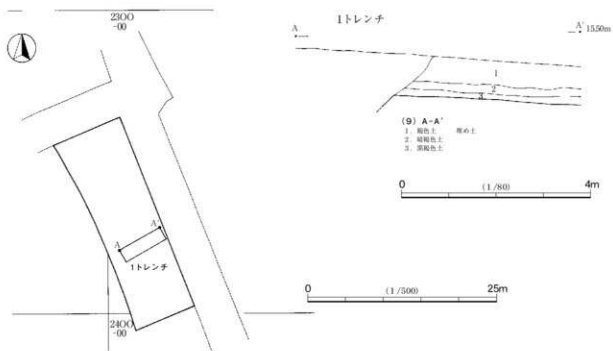
第 27 図 十太夫野馬土手 22-(3)



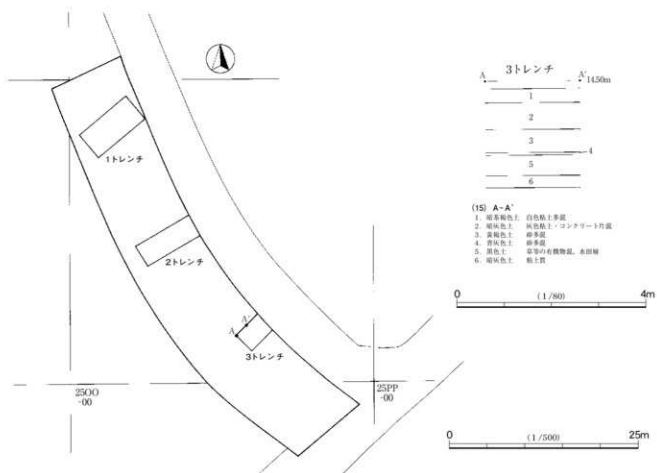
第28図 十太夫野馬土手23-(5)



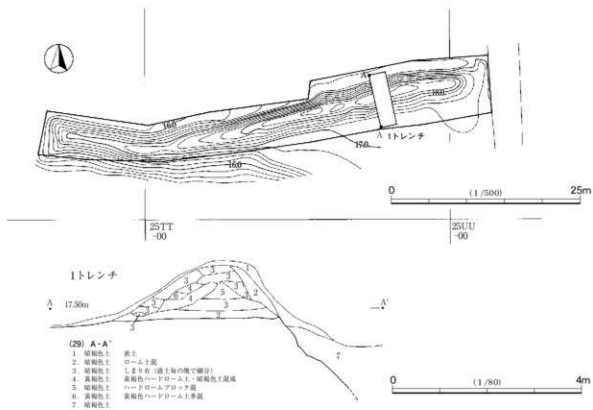
第30図 十太夫野馬土手25-(13)



第 32 図 十太夫野馬土手 27-(9)



第 33 図 十太夫野馬土手 28-(15)



第35図 十太夫野馬土手30-(29)

2 市野谷駒木野馬土手（第4表・第4・5図（G-H）・36～37図、図版6・7）

野馬土手は柏市域より大堀川に沿い、東西に伸びている。日光街道東往還を横切り南下し、牛飼沢上流の湧水地より流れ出た小河川に沿って、日光街道方面へ向かう。台地縁辺に構築されている。現在の「豊四季」という地名から分るとおり明治維新後の開墾の手が早く入った地域である。畑・果樹園に開墾されている地区も多いため、野馬土手の遺存状況の良い地点と、痕跡を残さない地点との差異が激しい。

現在はつくばエクスプレスの流山おおたかの森駅の付近にあり、すっかりその様相は変わっている。この牛飼沢付近の湧水地は「房総の近世牧跡」において水飲み場としている地点である。

調査対象面積2,983㎡、調査対象区全長736mであった。この先、江戸川から入る入り組んだ台地縁辺に沿って南下し、江戸川低地に向かっての上野牧の外周を構成する一部と考えられる。

3 駒木野馬土手（第5表・第4・5図（A-B）・38～40図、図版7）

大堀川東岸に位置し、流山市成願寺地崎付近より江戸川大学付近に延び、県道279号線をわたり、大堀川方面へと台地を下るように伸びる。大堀川を境として北東側は高田台牧となる。外周の土手の一部と考えられる。今回の調査区域は、調査対象面積1,783㎡、調査対象区全長140mであった。早い時期より開墾、宅地開発が行われたため、昭和30年代頃までは野馬土手も遺存していたと言う地元の話もあるものの、現在ではその大半が姿を消している。

第2節 出土遺物（第41図、図版7）

すべての遺物が野馬土手盛り土またはトレンチ内からの出土したものである。第2図（第2表）、第3図でみられるとおり、野馬土手周辺には旧石器時代～近世に至る数多くの遺跡が所在し、またこれらの遺跡内を野馬土手が通ってはいるものの、今回の調査においては、野馬土手の狭い範囲の調査であったため、それらと共通するような遺構や遺物の検出は得られなかった。

1 縄文時代

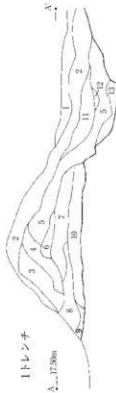
1～3は十太夫野馬土手の盛り土および堀埋土中からの出土である。第2・3図で示すとおり十太夫野馬土手の所在するエリアにはこれらの時期の遺跡はみられない。

1は安行Ⅱ系の深鉢であろうか。正面突起と思われる猫耳状の突起がみられる。2・3は類似の深鉢胴部破片である。野馬土手構築時に運搬された土中に含まれていたと考えられる。4は安山岩製の磨石である。磨石、叩石または凹み石としての利用がされたか、多様な痕跡が見られる。盛り土中からの出土であるため1～3の土器と同時期であるかは確定し得ないが、縄文時代のもと思われる。5～7は砥石片である。すべて摩耗し破損している。時期は不明である。

8～11は市野谷駒木野馬土手盛り土中から出土したものである。8はチャート製の剥片である。使用痕などは見られない。色調は褐色を示す。9は縄文時代中期加曾利E式中葉期の深鉢で、無文の口縁が大きく外反し、肩部に区画文帯が施されている。口縁部に赤彩が施される。10は加曾利B式における紐線紋系の深鉢の口縁である。口縁は内湾している。11は完形に近い砥石である。良好な石質で、中央部の摩耗状態からかなり丁寧に使用されていたものと思われる。野馬土手築造時に使用されたと考えられる。

市野谷谷胸木野馬土手 土層断面図例

- (1) A-A'
1. 黄土
 2. 腐植土
 3. 腐植土
 4. 腐植土
 5. 腐植土
 6. 腐植土
 7. 腐植土
 8. 腐植土
 9. 腐植土
 10. 腐植土
 11. 腐植土
 12. 腐植土
- 黄土
腐植土
腐植土
腐植土
腐植土
腐植土
腐植土
腐植土
腐植土
腐植土
腐植土
腐植土



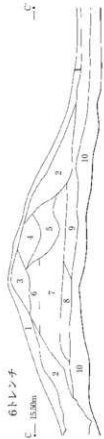
1:15,500



- (1) D-D'
1. 黄土
 2. 腐植土
 3. 腐植土
 4. 腐植土
 5. 腐植土
 6. 腐植土
 7. 腐植土
 8. 腐植土
 9. 腐植土
- 黄土
腐植土
腐植土
腐植土
腐植土
腐植土
腐植土
腐植土
腐植土



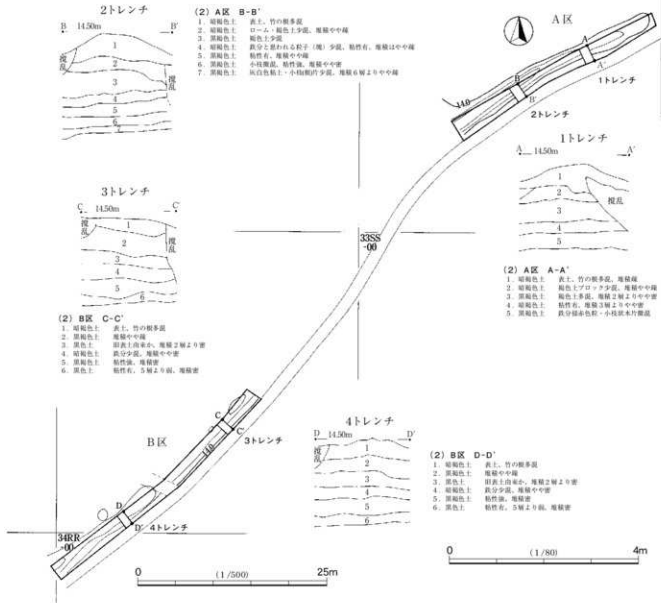
- (1) C-C'
1. 黄土
 2. 腐植土
 3. 腐植土
 4. 腐植土
 5. 腐植土
 6. 腐植土
 7. 腐植土
 8. 腐植土
 9. 腐植土
 10. 腐植土
- 黄土
腐植土
腐植土
腐植土
腐植土
腐植土
腐植土
腐植土
腐植土
腐植土



- (1) B-B'
1. 黄土
 2. 腐植土
 3. 腐植土
 4. 腐植土
 5. 腐植土
 6. 腐植土
 7. 腐植土
 8. 腐植土
 9. 腐植土
 10. 腐植土
- 黄土
腐植土
腐植土
腐植土
腐植土
腐植土
腐植土
腐植土
腐植土
腐植土



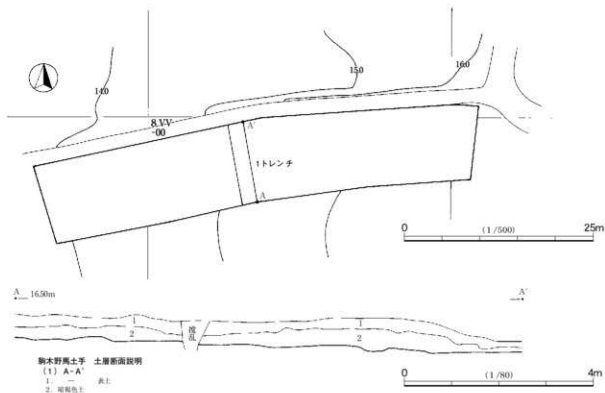
第36図 市野谷谷胸木野馬土手1-(1)



第37図 市野谷駒木野馬土手2-(2) A区・B区

第4表 市野谷駒木野馬土手調査概要一覧

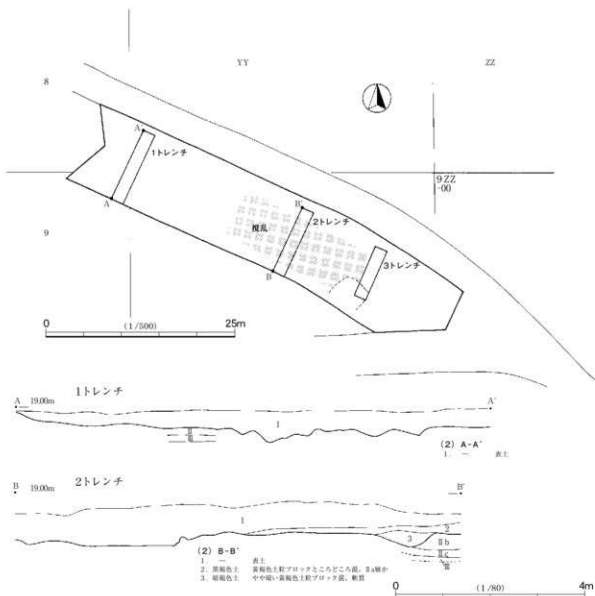
| 年 次 | 調査 回数 | 対象 面積 (㎡) | 掘削掘削 番号 | 探検 番号 | 図取 番号 | 全長 (調査区内) | | 土 手 | | 溝 | | 調査期間 | 所在地 | 調査区 所見 |
|------|----------|-----------------|----------------------------|----------|----------|----------------|--------------|------------|-----------|------------|-----------|-------------------------------|--------------------------------------|---|
| | | | | | | 土手全確認 できた長さ | 確定される 土手長 | 高さ (最大) | 幅 (最大) | 深さ (最大) | 幅 (最大) | | | |
| 平成14 | 1 | 2884㎡ | 市野谷 駒木 1-(1) | 38 | 6 | 160m | - | - | - | - | - | 2003/1/14 ~ 2003/1/27 | 波山市西初石6丁目 822ほか・船市豊四 季114-15ほか | 墓務園地帯を通るため、野 馬土手の遺存状態は良好で あった。野馬堀は当地点に おいては確認されなかった。 |
| 平成23 | 2 | 99㎡ | 市野谷 駒木 2-(2) A・B区 | 39 | 7 | 10m | - | - | - | - | - | 2011/11/16 ~ 2011/11/25 | 船市豊四季121-2の 一部ほか | 今回調査された範囲内から 野馬土手の痕跡は確認され なかった。 |
| | | 2983㎡ | | | | 170m | | | | | | | | |



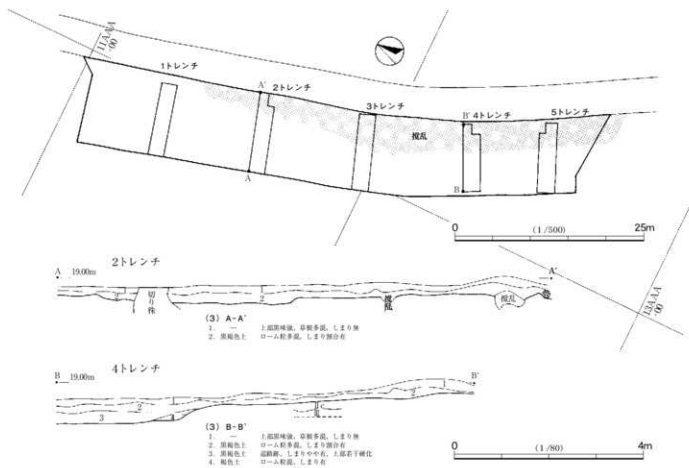
第 38 図 駒木野馬土手 1 - (1)

第 5 表 駒木野馬土手調査概要一覧

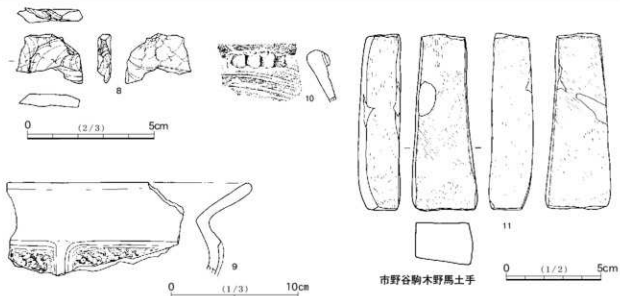
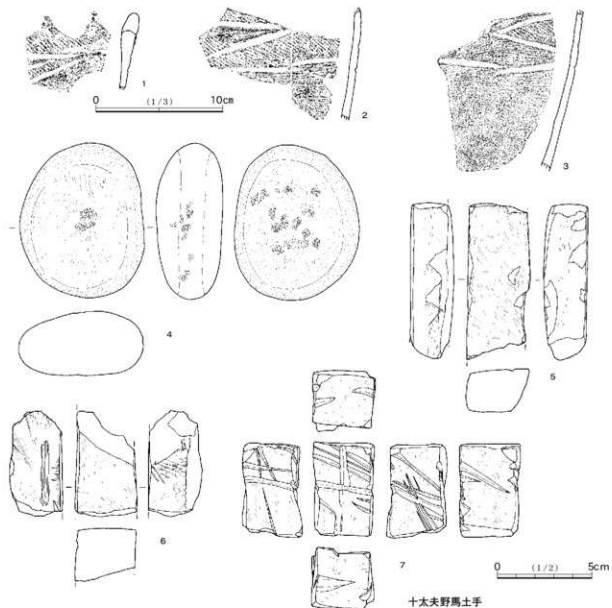
| 年 度 | 調査 回数 | 対象 面積 (㎡) | 挿戻筒 番号 | 挿戻 番号 | 図取 番号 | 全長 (調査区内) | | 土 手 | | | | 調査期間 | 所 在 地 | 調 査 区 所 見 |
|-------|----------|-----------------|-------------|----------|----------|---------------|--------------|------------|-----------|------------|-----------|-----------------------------|-----------------------|--|
| | | | | | | 土手確認 できた長さ | 推定される 土手長 | 高さ (最大) | 幅 (最大) | 深さ (最大) | 幅 (最大) | | | |
| 平成 16 | 1 | 600㎡ | 駒木 1-(1) | 35 | 7 | | 推定 (58) m | - | - | - | - | 2004/11/1 ～ 2004/11/5 | 流山市駒木 375-1 ほか | 周辺の状況から、大塚川に向 かい谷に沿って野馬土手が狭 く想定されたが、調査区内 に野馬土手の存在を確認す ることができなかった。 |
| 平成 22 | 2 | 490㎡ | 駒木 2-(2) | 36 | 7 | 43m | - | - | - | - | - | 2010/1/4 ～ 2010/1/8 | 流山市駒木 376-7 の 一部ほか | 短い段階での削平が行われた 可能性が高く、掘削が多く入 る。野馬土手の残欠かと推定 できるわずかな高まりが、併 行する市道下に伸びており、 北東方面に落ち込むと思われる。 |
| 平成 25 | 3 | 693㎡ | 駒木 3-(3) | 37 | 7 | 97m | - | - | - | - | - | 2014/2/17 ～ 2014/2/28 | 流山市駒木 345 ほか | 南北に走る道路に沿って調査 区が設定された。トレンチ内 からは野馬土手あるいは他の 痕跡は確認されなかった。 |
| | | 1,783㎡ | | | | 140m | 58m | | | | | | | |



第39図 駒木野馬土手2-(2)



第40図 駒木野馬土手3-(3)



第41図 調査区内出土遺物

第3章 まとめ

1 野馬上手について

今回報告される野馬上手は、小金五牧のうち上野牧と高田台牧に属する野馬上手である(第4図)。上野牧は、現在の地名で言うところと流山市東柳石地区から十六夫地区に中心を持つ十六夫野馬上手2条、同じく上野牧のうち、市野谷駒木野馬上手である。

上野牧と隣接し、北側に広がる高田台牧のうち、駒木野馬上手は、上野牧との境とされる大船川を望む台地上に築かれた牧の外周上手と思われる。

今回調査された高田台牧、上野牧は小金牧の支配に属し、大まかな外周は第4図に示した範囲、最大100mの範囲とされる。なお、この両牧北端部分は、第4図にある日立国地付近にあった上手により分離していたものと考えられる。

牧の構成の概略は、

① 野馬上手(大土手・野馬堀)

牧の外周、放牧エリアをいわゆる野馬上手で囲むものである。傾斜地などでは上手ではなく土手を低く堀を深くする箇所もあるといわれる。土手はおおむね高さ3m、堀は2m前後を測る。2重に作られる場合は、牧内を低く、牧外の土手を高くすることにより馬の牧外への逸走をしにくくしている。

② 勢子上手(中土手・大込土手)

野馬を捕まえて移動する際に誘導路として、あるいは広大な牧内をいくつかのブロックとして区切る土手である。勢子は集めた馬をこれらの上手に沿って移動させることで捕込へ誘導する。勢子上手の中でも捕込へ追い込みやすくするために「大込」上手が築かれる。

また野馬が集落、田畑への侵入することを防ぐためには野馬除土手が設けられる。こちらも土手と堀により構成され、野馬の侵入を防ぐために、場所によっては土手に対して堀が主となる場合もあるとされる。

③ 捕込(とりこめ・とっこめ)

毎年1回の「野馬捕」において馬を捕獲する主要な施設である。約200m四方の上手が築かれ、中は3区画に分けられる。まずは追い込んだ馬を集める区画(捕込・捕場)・捕獲した馬を収容する区画(溜込・分込)、そして再放牧する馬(親馬・当歳馬)を入れる区画(私込)が設けられるのが基本的な構造となる。

その他の施設としては、出入り口に至る木戸や水飲み場などがあり、遺構としては残されていないが、地名などに残る場合がある。木戸については小字などに残る場合が多いが、牧の場内外への出入り口や牧内の区画の上手に設けられたと考えられている。特に、上野牧は日光往還道が城内を縦貫していることから、複数箇所には設けられていた可能性が高い。このほかには幕府御用となる良馬(乗馬用)を集め飼育する御用と呼ばれる区画が設けられる。上野牧では国産馬改良のためにオランダから輸入した馬を飼育していたことが知られており、病死した馬を祀った「オランダ観音(延宝4年・1676年)」が今回調査された十六夫野馬上手範囲内(第5図-N-11Z区)に設けられている。

当地域は、古代からの牧としての利用と、江戸時代の早い時期からの新田開発とが複雑に入れ込むことから、野馬土手あるいは野馬除けの土手などは開発の進展とともに定期的にあるいは必要に応じて改修・改築の手が入っていたと思われ、時期による野馬土手の変遷はとらえきれないものがある。

個々の野馬土手についての概要をみるならば、駒木野馬土手（第5図A～B）は今回の調査においては土手の構造などを明確にとらえることはできなかったが、本来の想定される土手の位置からは、第4図に示した高田台牧の外周、大堀川を望む台地縁辺に設けられ、旧来より知られる野馬土手に接続し、北上してゆく列につながることが想定できる。高田台牧の西側境界を構成する馬土手であったと考えられよう。

上野牧の野馬土手のうち十太夫野馬土手は大堀川を境界とするように高田台牧と向かい合わせに台地上に設けられ、台地縁辺に沿う列（第5図C～D）と、並行するように例幣使街道方面へ向かう土手（第5図E～F）が第4図に示した野馬土手外周のラインにつながってゆき、その延長は市野谷駒木野馬土手方面へとつながる。この付近は築造時期が明確ではないため確定しえないが、市野谷駒木野馬土手（第5図G～H）は牧の北側と南側を区切るかのような位置にあり、牧内の仕切りを目的とした中土手となる可能性もある。

土手の総延長は「東葛飾郡誌」によれば、小金牧（外周総）延長75,967間（約140km弱）とされ、別称とも言える「40里野」（約157km）としても外周総距離にそれほど差異は無い。

この範囲の牧内で管理飼育されていた馬の頭数については、3,000頭とも5,000頭とも言われるが、「寛政の牧の改革」（寛政5年・1793～）により、繁殖成績が芳しくなかった小金牧において5年間の捕馬売り払いを停止して増産計画が立てられた。その成果として3年後の寛政8（1796）年には2,089頭の増加が報告され、5,013頭が小金牧において確認された（野馬方諸事元極書抜下書 川上一男家蔵）。

また「下総国旧事考」に記されている数値によれば、「上野牧」に馬数300頭、「高田台牧」に450頭、「中野牧」300頭、「下野牧」に300頭、「印西牧」150頭の馬がいるとされている。前述の5,000頭との差異については牝馬の頭数の集計かと思われる。自由放牧による繁殖であるが、牧士による牧内の管理が行われていることを考えると以上の頭数が基本的な飼育数であろう。

江戸時代に刊行された書物には40里野とも記され、「広い」「大きい」の代名詞ともされ、江戸近郊の名所でもあった。俳人の小林一茶は、15年の間に50回以上も流山を訪れている。江戸を出て日光街道から流山に向かうには上野牧あるいは高田台牧を通り、向かったと考えらる（注）。当時の牧の様子が文人の手により残されており、自然放牧下における牧の様子がしのばれる。また松戸市小和清水公園には、「母馬が番して吞ます清水かな（『八番日記』文政2年、1812）」の句碑が建てられており、牧を題材とした句も知られる。その中には牧内（小金原）を禁煙としていたことを示す句も残されている。

「しぐるゝや煙草法度の小金原」（『八番日記』文政3年、1813）

「永き日や煙草法度の小金原」（『文政句帖』文政5年、1822）

これは牧草地として野火の防止、山火事などの管理上の重要課題でもあったであろう。

捕馬は、主に3歳の若駒が捕獲の対象となり、乗馬用と使役馬とに分けられる。この捕獲された使役馬とされた野馬の販売は江戸時代後期、旧牧エリアの開墾払い下げ、薪炭材払い下げなどとともに、困窮する幕府の財政の一端をわずかなりとも担ったことであろう。

2 野馬土手から出土した遺物について

当野馬土手に近接して市野谷周辺の遺跡群（第2図）が所在しており、市野谷立野遺跡からは1,000点を超える旧石器時代の石器の出土が知られる。今回チャート製の切片が出土していることから、当野馬土手周辺にも関連する遺跡が所在した可能性を考慮することができる。また縄文時代中期から後期に関しては、近隣の遺跡、特に十太夫野馬土手と隣接する大久保遺跡から第41図10と同類の土器が出土していることが報告されており、土手の盛り土削平などにかかわる作業によって、関連した遺構あるいは遺跡周辺から持ち込まれた可能性が考えられる。

(注)「寛政三年紀行」松戸馬橋から流山に向かう道筋での紀行文である。

廿九日小金原に懸る此原は公の馬を養ふ所にして長さ四十里を以て四十野といふ草はあく迄青み花も稀に咲て乳を呑胸は水に望む有伏仰く有皆々食に富ておのがさままたのしむ是彼等が全盛といふべししかるに霜降木の葉落る頃はいかめしき牧野有て柱のやうなる荒縄もて口を割首を縛り青竹のふとくまきにて息のねのたゆる程に戯れつつ武門の貢に曳る夏は親子一所にして祝ひ今は別々の患を見る馬の心には冥史呵責のくるしみとも思わぬ余念なく狂ふにつけても行末思ひやられてあはれ也。

馬の子と一所に延鮭かな（寛政3年）
馬の子の故郷はなる秋の雨（享和3年）

小金五牧における野馬捕りの時期は、春（2～4月）、夏（6～8月）、冬（10～12月）のいずれかであった。この紀行の記された、寛政期（1789～1800）から文政期（1818～1830）までは冬（9～12月）に行われており、「霜降木の葉落る頃」・「故郷はなる秋の雨」である。それ以降の廃止までは春（2～4月）に行われた。

参考文献

- 1 清宮秀堅 下総国旧事考 1905
- 2 千葉県東葛飾郡教育会 千葉県東葛飾郡誌 1923
- 3 佐倉市 1973 『佐倉市史』 佐倉市
- 4 松戸市 1978 『松戸市史 中巻 近世編 小金牧』 松戸市
- 5 松下邦夫 1979 『松戸歴史案内』 郷土史出版
- 6 佐藤 悟 1984 『一茶「寛政三年紀行」花園百樹写本』 連歌俳諧研究
- 7 印西町 1992 『印西町史 資料集 近世編3』 印西町史編纂室
- 8 印西町 1993 『印西町史 資料集 近世編4』 印西町史編纂室
- 9 松戸市立博物館 1994 『牧と馬 かつて松戸は牧場「まきば」だった』 松戸市立博物館
- 10 柏市史編さん委員会 1995 『柏市史 近世編』 柏市教育委員会
- 11 松下邦夫 1996 『流山市史研究 第13号 近世小金牧の実測図』 流山市
- 12 白井市 2000 『広報しろい 小金牧の牧士資料』 白井市役所
- 13 青木更吉 2001 『小金牧 野馬土手は泣いている』 嵩書房
- 14 流山市立博物館 2001 『流山市史 通史編1』 流山市教育委員会
- 15 青木更吉 2003 『小金牧を歩く』 嵩書房
- 16 千葉県 2007 『千葉県の歴史 通史編 近世1』（財）千葉県史料研究財団
- 17 千葉県教育委員会 2006 『県内遺跡詳細分布調査報告書 房総の近世牧』 財団法人千葉県教育振興財団
- 18 鎌ヶ谷市 2008 『国史跡下総小金中野牧跡保存管理計画書（案）』 鎌ヶ谷市教育委員会
- 19 宮本万里子 2012 『下総台地における牧景観の特徴とその変遷過程』
東京大学大学院 新領域創成科学研究科 自然環境学専攻 自然環境形成学分野
- 20 （公財）千葉県教育振興財団 2015 『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書7』（公財）千葉県教育振興財団
- 21 （公財）千葉県教育振興財団 2016 『白井市印西牧野馬除土手』（公財）千葉県教育振興財団

写 真 图 版



例略使街道

十六実野郷土手

廣木野郷土手

大堀川

市子谷本郷土手

坂川



十文字4-04
1 トレンチスタロン (北から)



十文字5-00
2 トレンチスタロン (北から)



十文字6-07
調査風景 (北から)



十文字7-06
2 トレンチスタロン (北から)



十文字4-04
調査風景 (北から)



十文字5-00
2 トレンチスタロン (北から)



十文字6-07
調査風景 (北から)



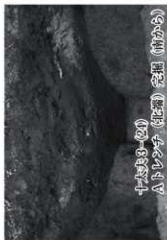
十文字7-06
調査風景 (北から)



十文字1-00
1 トレンチスタロン



十文字2-05
5 トレンチ (B区) 発掘 (北北北から)



十文字3-02
A トレンチ (B区) 発掘 (北から)



十文字3-02
SR-001 (C トレンチ) (北から)



十文字2-00
調査風景 (北から)



十文字2-05
北北北手発掘 (北北北から)



十文字3-02
調査風景 (北北北から)



十文字3-02
C トレンチ発掘 (北北北から)



十区10-(8)
1 トレンテセクション (11区)



十区10-011
2 トレンテセクション (11区)



十区12-(4)
谷津地区 (12区)



十区12-(4)
谷津地区 (12区)



十区10-(8)
2 トレンテセクション (12区)



十区11-011
1 トレンテセクション (12区)



十区12-(4)
谷津地区 (12区)



十区12-(4)
谷津地区 (12区)



十区3-(22)
10 トレンテセクション (11区)



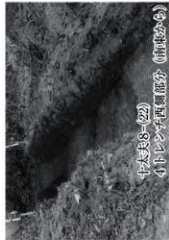
十区9-016
真直地区 (12区)



十区9-016
8 トレンテセクション (12区)



十区10-(8)
11 トレンテセクション (11区)



十区3-(22)
4 トレンテセクション (11区)



十区9-016
真直地区 (12区)



十区9-016
真直地区 (12区)



十区10-(8)
11 トレンテセクション (12区)



十文字 15-(1)
1 トレーサビッドクローン (E15か6)



十文字 16-(2) B
B区ビッドクローン



十文字 17-00
8 トレーサビッドクローン (E17) (E15か6)



十文字 17-00
1 トレーサビッドクローン (E17) (E15か6)



十文字 15-(1)
調査跡写真



十文字 16-(2)
調査跡写真



十文字 17-00
調査跡写真 (E17) (E15か6)



十文字 15-00
2 トレーサビッドクローン (E15) (E15か6)



十文字 12-(4)
4 トレーサビッドクローン (E12か6)



十文字 13-01
1 トレーサ



十文字 14-03
調査跡写真 (E14か6)



十文字 14-03
1 トレーサ



十文字 12-(4)
5 トレーサ中核 (E12か6)



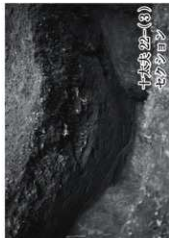
十文字 13-01
E区 (E13か6)

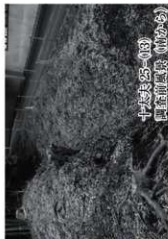


十文字 14-03
調査跡写真 (E14か6)



十文字 14-03
調査跡写真



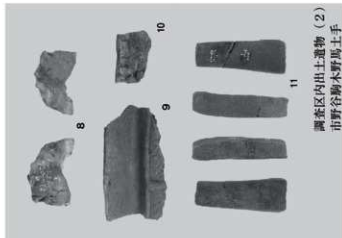




十太夫野馬塚



十太夫野馬塚



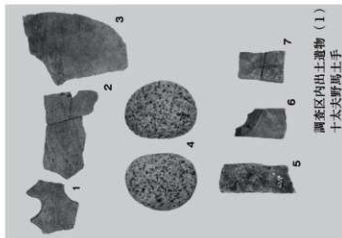
調査区内出土遺物 (2)
市野谷駒木野馬上手



市野谷駒木野馬塚



市野谷駒木野馬塚



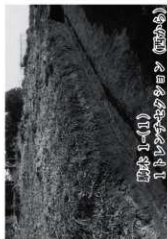
調査区内出土遺物 (1)
十太夫野馬上手



市野谷駒木 2-(2)
馬塚遺跡 (北か)



市野谷駒木 2-(3)
1トレンチ状穴状モクシヤン (北か)



馬塚 1-(1)
1トレンチ状モクシヤン (北か)



馬塚 3-(3)
馬塚遺跡 (北か)



市野谷駒木 2-(2)
馬塚遺跡 (北か)



市野谷駒木 2-(2)
2トレンチ遺跡 (北か)



馬塚 1-(1)
馬塚遺跡 (北か)



馬塚 3-(3)
馬塚遺跡 (北か)

報告書抄録

| | | | | | | | | |
|---------------------------------------|---|------|--------|-------------------|--------------------|------------------------------|-----------|--------------------|
| ふりがな | ながれやましんしがいちちくまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ | | | | | | | |
| 書名 | 流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書 | | | | | | | |
| 副書名 | 流山市十太夫野馬土手、流山市・柏市市野谷駒木野馬土手、流山市駒木野馬土手 | | | | | | | |
| 巻次 | 9 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 千葉県教育振興財団調査報告 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第767集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 池田大助 | | | | | | | |
| 編集機関 | 公益財団法人 千葉県教育振興財団 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡 809 番地の2 TEL 043-424-4848 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2017年3月28日 | | | | | | | |
| ふりがな | ふりがな | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 ㎡ | 調査原因 |
| 所収遺跡名 | 所在地 | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| じゅうたうのまどうて 十太夫野馬土手 (1)～(30) | ながれやましんしがいちちくまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ 流山市初石五丁目4番 地ほか | 220 | 048 | 35度 52分 51秒 | 139度 55分 27秒 | 2006.2.1 ～ 2016.2.23 | 21,944 | 土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査 |
| いらのやこまぎのま 市野谷駒木野馬 土手 | ながれやましんしがいちちくまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ 流山市西初石6丁目 822ほか 柏市豊四季114-15ほか | 220 | 056 | 35度 52分 51秒 | 139度 55分 15秒 | 2003.1.14 ～ 2011.11.25 | 2,983 | 土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査 |
| こまぎのまどうて 駒木野馬土手 | ながれやましんしがいちちくまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ 流山市駒木 375-1ほか | 220 | 060 | 35度 52分 27秒 | 139度 56分 12秒 | 2004.11.1 ～ 2014.2.23 | 1,783 | 土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 | |
| じゅうたうのまどうて 十太夫野馬土手 (1)～(30) | 野馬土手 | 江戸時代 | 野馬土手・溝 | | 縄文土器・石器・砥石 | | | |
| いらのやこまぎのま 市野谷駒木野馬 土手 (1)～(2) | | | | | | | | |
| こまぎのまどうて 駒木野馬土手 (1)～(3) | | | | | | | | |
| 要約 | <p>今回調査された野馬土手は、徳川家康の江戸入府（天正18年1590）により、江戸周辺での軍馬の養成と使役馬の供給を目的として作られた幕府直営の牧の一部である。通説では慶長19（1614）年に小金牧・佐倉牧が設置されたとするが、牧土家の由緒書などに基づくため必ずしも明確ではない。慶長19年、同20年には大量の軍馬・使役馬を必要とする「大坂冬の陣・夏の陣」が起きており、実際には入府直後から逐次整備されていたものと考えられる。十太夫野馬土手および市野谷駒木野馬土手は小金牧のうち「上野牧」のほぼ中央部、牧内の外周及び広大な牧内を区画し、管理することを主目的とした土手と考えられる。駒木野馬土手は大堀川北岸に位置し「高田台牧」の外周土手となると思われる。調査区においては土手及び堀の一部が検出されているものの、併行して走る道路下に野馬土手にかかわる遺構があったものと想定される。</p> | | | | | | | |

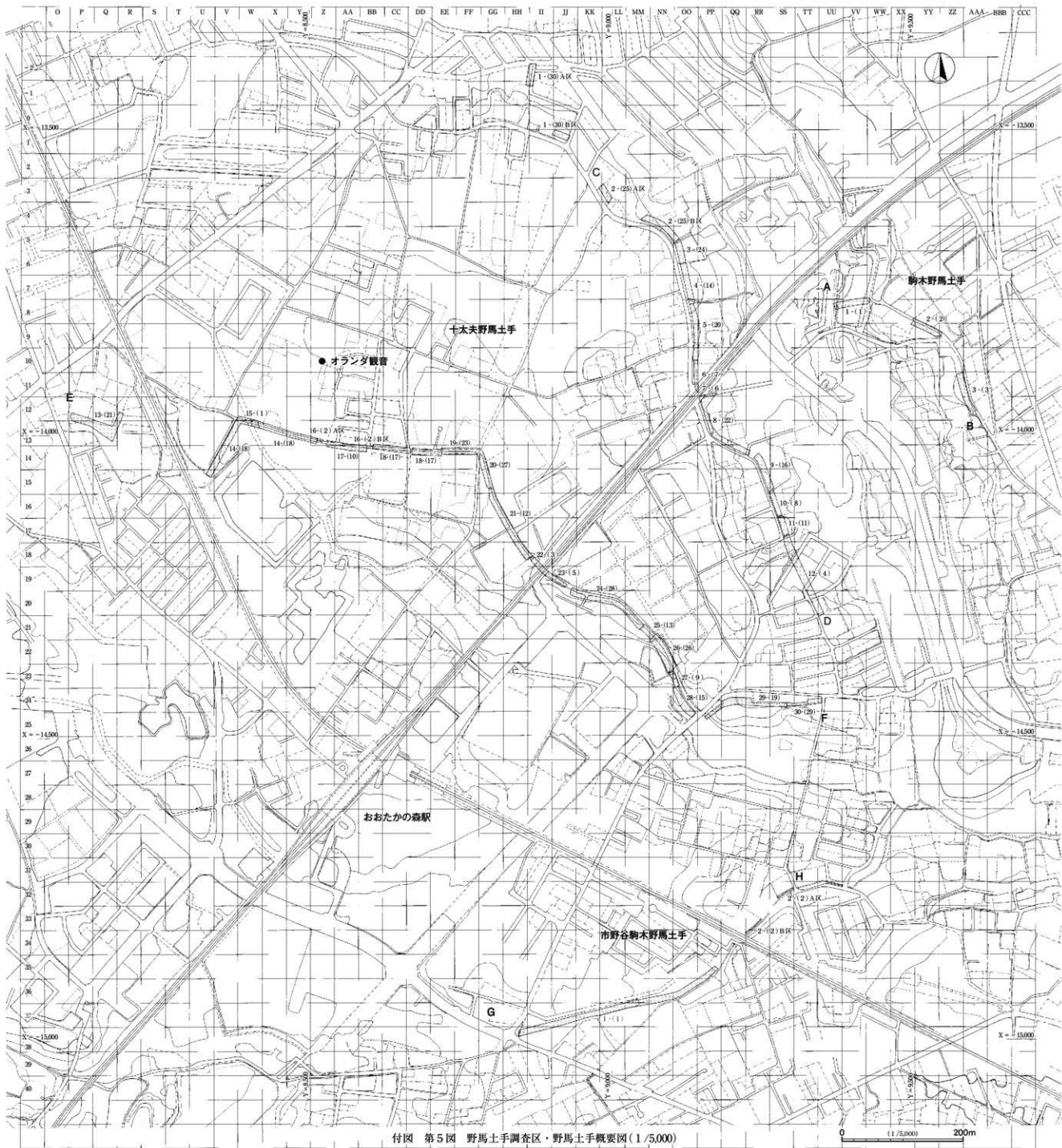
千葉県教育振興財団調査報告第 767 集

流山新市街地区埋蔵文化財調査報告書 9

－流山市十太夫野馬土手、流山市・柏市市野谷駒木野馬土手、流山市駒木野馬土手－

平成 29 年 3 月 28 日発行

編 集 公益財団法人 千葉県教育振興財団
発 行 独立行政法人 都市再生機構
首都圏ニュータウン本部
東京都新宿区西新宿 6-5-1
公益財団法人 千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡 809 番地の 2
印 刷 株 式 会 社 ラ イ フ
成田市東和田 595



付図 第5図 野馬土手調査区・野馬土手概要図(1/5,000)

